

大学礼拝 説教集

第 17 号



2013
東北学院大学

表紙の絵について

泉キャンパス礼拝堂にはアルフレッド・ケルン社(フランス)の制作による壮大なフレンチ・クラシカルオルガンが設置されています。グラントルグ(第一)、ポジティブ(第二)、そしてレシ(第三)の三弾から成る手鍵盤には九列のリード管、さらには足鍵盤に四列のリード管が、五七の多様なストップ(音栓)で音色を変え、荘厳で力強い響きを奏でます。スタンドグラス越しにチャペルに注がれる柔らかな光の中、この泉キャンパスでは、日曜日を除いて毎日、礼拝がささげられています。

大学礼拝

説教集

第 17 号

2013

東北学院大学

目次

巻頭言

弟子としての覚悟

災害ボランティアステーション

祈り

もし信じるなら

新しく生きる

希望の光

『誰が』そして『誰に』

今日を存分に生きよう

私はあなたと共にいる

心に立ち返れ

宗 教 部 長

理 事 長

学院長（大学長）

仙台ホサナ教会

仙台東一番丁教会

東北学院中学校・高等学校
宗 教 主 任

東北学院榴ヶ岡高等学校
宗 教 主 任

宗 教 部 長

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

佐々木 哲夫……………4

平河内 健治……………7

星 宮 望……………12

長 尾 厚 志……………19

保 科 けい子……………23

松 井 浩 樹……………29

西 間 木 順……………35

佐々木 哲夫……………40

野 村 信……………49

北 博……………55

出 村 みや子……………60

彷徨い出た魂が見出されるとき

大学宗教主任

村上みか……………66

一つに結び合わせる神の力

大学宗教主任

原田浩司……………70

働きによらない賃金

総合人文学科長

原口尚彰……………75

神に栄光、地に平和

総合人文学科教授

佐々木勝彦……………80

幸い

経営学部教授

保坂和男……………86

主に信頼する勇氣

経営学部教授

松村尚彦……………91

天に積む富

法学部准教授

横田尚昌……………97

一粒の麦

工学部教授

星宮務……………102

おむらさん

工学部准教授

長島慎二……………108

人生を変える秘訣パートI

教養学部准教授

大澤史伸……………115

ENGLISH CHAPEL SERVICE

文学部教授

D・N・マーチ……………123

編集後記

大学宗教主任

原田浩司……………124

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

次の譬え話が福音書に記されています。

マタイによる福音書、第七章二四～二九節

24 「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。25 雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲つても、倒れなかつた。岩を土台としていたからである。26 わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。27 雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかつた。」

28 イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。29 彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになつたからである。

岩の上に家を建てた賢者と砂の上に建てた愚者が対比されています。建物の外観は同じなのですが、暴風雨の時に両者の違いがはつきりするということです。これは、「言葉聞いて行う者」と「行わない者」を比喩的に対比させたイエス・キリストの譬えです。読者は、自分の人生において出会うさまざまな災厄をこの譬えに重ねて読むかもしれません。ところで、聖書の群衆たちは、話の内容ではなく、権威ある者として教えたイエス・キリストの姿に驚いています。彼らの律法学者と違う雰囲気を感じたのです。

例えば、ここに先般ノーベル賞を受けた山中先生の講演原稿があるとします。その原稿を、i P s 細胞と無関係な素人弁士が一字一句正確に読み上げたとします。他方、同じ原稿を山中先生自身を読み上げるとします。聴衆は、講演者が誰であるかを知っていますので、同じ原稿であっても、講演者の発する雰囲気の違いを敏感に感じとることでしょう。それは、講演者と講演内容が重なり合うときに醸し出される雰囲気だと思われれます。

さて、群衆は、譬えを語ったイエス・キリストに異なる雰囲気を感じて驚きました。恐らく、イエス・キリストが岩そのものであることを感じ取ったからだと思われる。換言するならば、イエス・キリストが、人生を建て上げる基盤そのものであることを感じ取ったのです。

この『説教集』がイエス・キリストの雰囲気伝えるものであることを願う次第です。

「弟子としての覚悟」

理事長 平河内 健 治

マタイによる福音書、第八章一八―二七節

18 イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。19 そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。20 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」21 ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。22 イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

23 イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。24 そのとき、湖に激しい嵐が起り、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。25 弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。26 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とお叱りになると、すっかり風になつた。27 人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うでは

ないか」と言^いつた。

キリスト教に基づく建学の精神をもつ大学に学び、また、そこで仕事をしている私たちには、毎日の礼拝や生活全般において、イエスの弟子としての覚悟が問われていると思います。そこで、ここでは只今お読みした御言葉を通して、「イエスに従う」ということはどのようなものかに、想いを向けてみたいと思います。

先ず、私たちが本当に幸せになりたい、人々を本当に幸せにしたいと願うなら、この世的には、人の子、つまり、イエスご自身すら枕する所もない、つまり、安住安眠することのできない位の大変な試練や困難というものを避けることができない世に、私たちも生きて行く覚悟が要ることを知るべきだということを、イエスが行く所どこへでも従うと述べた律法学者への応答から学ぶことができません。律法学者は「この先生についていけば、安心と平和が楽に得られる」と覚悟のないままに頼ろうとしたのでしょうか。律法学者は「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従つて参ります」（一九節）と述べます。一種の「ごますり」でもあります。その「依存体質・すりより体質」を即座に感じ取り見抜いたイエスは「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない」（二〇節）と応答します。

また、私たちは弟子の一人のように、いろいろな言い訳をして、大変なことは避けようとしています。弟子の一人はイエスに「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」（二二節）と頼みます。ここにも優先しなければならぬ大切なものがあるかの如く装って、また、半ば自分自身に信じ込ませて、真に大切なことに向かおうとしない自分の姿をみることができません。言い訳は自分を守るための保身の術の一つであります。そのような言い訳体質・保身体質だけでは自分の折角の「地の塩」「世の光」としての能力が発揮できず、萎縮するだけで自尊心をも失ってしまいます。このような生きる姿勢も、イエスによってその是非が問われております。

二三節以下には、イエスに従った弟子たちすら、人生に本気で立ち向かう姿勢でなかったことが記されています。弟子たちはイエスから向こう岸に行くよう命じられたので、舟を用意します。「イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った」と二三節には記されています。命じられた人生、つまり、招かれた人生を送る決断をし、覚悟を決めてイエスに従ったはずでした。

しかし、そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波に飲まれそうになります。ある注釈書によると、原文は「海中に大きな地震があった」と直訳できるとのことです。念のために、佐々木哲夫宗教部長にギリシャ語原典にあたって見ていただいたところ、その通りのものでした。東日本大震災の津波襲来を想起すると、弟子たちの恐怖心も理解できるかもしれません。弟子たちは恐

怖心からパニック状態になり、一日の癒しの業からお疲れになり眠っていたイエスに近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」（二五節）と助けを求めます。声をかけるだけでなく、イエスのからだをゆすつて目を覚まさせ、実力行使をして必死に訴えた姿が想像できます。それだけに恐怖に慄くような大きな試練に遭遇したわけです。自分の意志力や行動力だけでは退治できない想定外の未曾有の魔物との出会いであったわけです。

イエスは「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」と弟子たちを窘め、風と湖とを叱ります。すると、すっかり凧になります。岸にいた人々は驚き、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」（二七節）とイエスの権能と權威に驚嘆します。イエス・キリストは特別の権能の持ち主であることが示されております。

ここから学べることは、先の「依存体質・すりよ一体質」と「言い訳体質・保身体質」を自分の意志力や決断によって避けるだけ捨てるだけでは不十分であるということです。最も必要なのは、イエス・キリストへの信仰に由来して生きる姿勢であります。すべての現実の試練があるがままに捉えて、謙虚な姿勢で自分を超えた方の導きを待つことが求められます。その時に私たちの知性も感性も輝きを増します。

私たちはイエスに招かれ命令されイエスの船でこの世の人生を旅しています。イエスは常に同

乗っています。イエスは平安と安らぎの中で一緒に舟に乗っていただきます。眠っているようにも見えます。イエスが伴におられることを意識しない場合が多くあります。しかし、人間の意志力ではどうにもならない危機や試練に遭ったとき、必死に虚心坦懐に助けを求めれば、信仰が薄い者であったとしても、キリストは常に私たちに寄り添い救いの手を差し伸べてくださいます。

キリストは私たちを愛し、決して見捨てることはありません。どのような魔物に遭遇しても、悪魔の誘惑に陥ろうとしても、常に、寄り添っていてくださるキリストの導きを信じたいものです。そのことよって苦難に立ち向かえる意味ある人生が送れるよう祈りたいと思います。

「災害ボランティアステーション」

学院長（大学長） 星 宮 望

ルカによる福音書、第一〇章二五～三七節

25すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27彼は答えた。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。」28イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32同じように、レビ人もその

場所^{ばしよ}にやって来た^きが、その人^{ひと}を見ると、道^{みち}の向^むこう側^{がわ}を通^{とお}って行^いった。33 ところが、旅^{たび}をしていたあるサマリア人^{じん}は、そばに来^くると、その人^{ひと}を見て憐^{あわ}れに思^{おも}い、34 近^{ちか}寄^{かよ}って傷^{きず}に油^{あぶら}とぶどう酒^{しゅ}を注^{そそ}ぎ、包^{ほら}帯^{たい}をして、自^じ分^{ぶん}のろばに乗^のせ、宿^{やど}屋^やに連^つれて行^いって介^{かい}抱^{ほう}した。35 して、翌^{よく}日^{じつ}になると、デナリオン銀^{ぎん}貨^か二^{まい}枚^{まい}を取^とり出^だし、宿^{やど}屋^やの主^{しゅ}人^{じん}に渡^{わた}して言^いった。『この人^{ひと}を介^{かい}抱^{ほう}してください。費^ひ用^{よう}がもつとかかたら、帰^{かえ}りがけに払^{はら}います。』36 さて、あなたはこの三人^{にん}の中で、だれが追^おいはぎに襲^{おそ}われた人^{ひと}の隣^{りん}人^{じん}になつたと思^{おも}うか。』37 律^{りつ}法^{ぽう}の専^{せん}門^{もん}家は言^いった。「その人^{ひと}を助^{たす}けた人^{ひと}です。」そこで、イエスは言^いわれた。「行^いって、あなたも同^{おな}じようにしなさい。」

聖書のこの箇所は、主イエスの教えの中でも「善きサマリア人」のたとえとして有名なところです。本日は、この聖句に関連させて災害ボランティアについて考えたいと思います。

このイエス様のたとえ話の背景を見てみましょう。このサマリア地方は北のガリラヤとエルサレムの間の中央パレスチナにあり、旧約聖書にたびたび記述されたようにバアル礼拝を行い、倫理的に墮落しているとしてエルサレムを中心とするユダヤ人とは確執があつて、ユダヤ人からは

民族的にも宗教的にも差別視されていたようです。一方、この旅人の不幸を最初に見た祭司も、その次に見たレビ人も、ユダヤ人の中では尊敬されていた人々でした。このような背景で、ユダヤ人の律法の専門家（いいかえれば旧約聖書のモーセの五書などに精通した人）が主イエスを試そうとして行った質問に端を発してのやり取りとして記述されています。

最終的には、このたとえ話の後で、主イエスが「あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と問います。それに対して、律法の専門家は「その人を助けた人です」と答えます。そこで、主イエスは「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われました。

私たちはこのたとえ話を聞いて、ここに述べられている「善きサマリヤ人」のようにありたいと思うものです。しかし、なかなか、実際の人生でこのようなことをすることは容易ではないでしょう。でもできることを何か行いたいと思いませんか？

昨年三月十一日に発生した東日本大震災直後から、被災者支援のためのボランティア活動が展開されました。本学でも、早速、「災害ボランティアアステーション」を立ち上げ、多くの学生諸君とともに活動してきました。このルーツがこの「善きサマリヤ人」にあると思います。

私たちの東北学院大学には、「セツルメント会」というサークルがあります。この会は、本学の課外活動団体として昭和三〇年に創設以来、本学の建学の精神である隣人愛の運動と実践を文字通りひとすじに活発な活動を続けております。最初の頃の活動としては、当時、秋保に開園したばかりの宮城県整肢拓桃園の肢体不自由児を訪問して、紙芝居を演じ合唱や談笑をして子供たちを慰問したことを皮切りに、その後、整肢拓桃園、仙台キリスト教育児院や玉浦ベッドスクールのなどを定期訪問することとしたほか、西多賀ベッドスクールなど、多くの施設を訪問して交流を深めてきております。まさにこの「善きサマリヤ人」にならうことを活動の中心にすえて、五〇年以上の実践活動を積み重ねてきておられます。この長い期間にわたり継続的に「奉仕活動」をしてこられたことが、今日の「災害ボランティアステーション」発足につながっていると、言うて良いでしょう。

日本におけるボランティア活動は、一九九五年（平成七年）一月一七日の阪神淡路大震災のころから一般的になってきたといわれています。誰しも予想しなかった大震災が起こって多くの方々が災難にあっていることを目の当たりにして、他人事ではないと感じて行動をとられたことと思えます。そして、この二年後の一九九七年（平成九年）一月二日に島根県沖で起こったナホトカ号の重油流出事件でも多くの方々ボランティア活動で協力されました。

そして、最近ではさらに多くの人々がボランティア活動に取り組むようになってきております。特に、東日本大震災の被災地でもある、宮城県、仙台市においては、すぐ目の前の厳しい現実を見るにつけ、多くの学生諸君がボランティア活動をしておられることに敬意を表します。東北学院大学災害ボランティアステーションは、二〇一一年（平成二三年）三月一日に発生した東日本大震災を受け、被災地にある大学として地域情報を集約・共有し、支援を必要とする人に本学学生・教職員が直接支援するとともに、各市町村の災害ボランティアセンターや全国の大学と連携し、被災地支援のための広範な活動を中継・展開することを目的に、震災後の三月二九日に設立いたしました。また、ステーションでは、地域貢献とともに、学生にボランティアという新しい学び・成長の場を提供する役割を担っております。これまでの活動実績としては、①被災地支援では、県・市・区の災害ボランティアセンターとのボランティア活動連携、気仙沼市、石巻市、名取市、亘理町、仙台市若林区などで瓦礫撤去・汚泥除去作業、塩竈市などで避難所から仮設住宅への引越作業、多賀城市で避難所の子どもへの絵本の読み聞かせ・遊び相手などです。特に、気仙沼市では「気仙沼プロジェクト」として、昨年の七月中旬から九月下旬の夏休みにかけて、唐桑地区にて五泊六日を一クルーとして一クルーが二カ月半途切れることなく、全国の一四大学と協同でボランティア活動を行いました。参加した人数は、学生・教職員合わせて約三百二十

名になっております。②復興イベント関係では、国内外から著名人等が来学した際に被災地訪問への協力として、ブルガリア大使リユミボル・トドロフ氏と歌手のヴァリヤ・バルカンス氏らの訪問時や、米国駐日大使ジョン・V・ルース氏の訪問時などに被災地訪問への協力があげられます。また、これらに関連して仙台市沿岸部や東松島市で演奏会や子どもの遊び相手、ラウンドテーブルなどを実施しました。③講演・シンポジウム関係では、平成二三年五月二七日に、全国から一〇大学の関係者が本学に集まり、「大学間連携災害ボランティアネットワークオフミーツィング」を開催したことがあげられます。④学術的な支援活動としては、河北新報社出版の写真集の英訳、海外から届けられた手紙の和訳などの「翻訳ボランティア」活動を実施したことや、大震災で被災した地域の博物館収蔵品や生活用具など、文化財を救出し、再生する「文化財レスキュー」活動を実施してきました。

このような、ボランティアとしての献身・奉仕の諸活動は、ずっと以前からの東北学院大学セツルメント会の活動に始まり、今日のボランティアステーションの活動に繋がっていると云ってよいでしょう。そしてそれは、本日拝読した「善きサマリヤ人」の教えに沿ったものであると思います。今回は触れませんでした。新約聖書の「マタイによる福音書」の第七章にある主イエスキリストの言葉、「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさ

い。これこそ律法と預言者である。」も同じ内容の教えであり、これは、“The Golden Rule”（黄金律）とも言われ、イエス・キリストが弟子たちに教えた、最も重要な御言葉であると思います。災害ボランティアを考えるに当たって、このことを覚えたいと思います。

（平成二四年七月）

「祈り」

仙台ホサナ教会 長尾厚志

テサロニケの信徒への手紙一、第五章一七節

¹⁷絶えず祈りなさい。

新しい年度でキリスト教に初めて接する学生の方もおられますので、キリスト教とは何か、ということについてお話しをしたいと思います。「祈り」についてお話ししたいと思います。

「祈り」というと皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。それは「願い」なのではないかと思えます。こうしてください、あーしてください、困った時に、本当にどうしていいのかわからない時に、思わず口に出てくるものだと思います。確かに「お願いごと」ということもあります。もう一方で別な面もあります。

まずお祈りをする時どうするのか、ということをお祈り浮かべてみましょう。まず目をつぶります。

そして手を組みます。この目をつぶる、手を組む、さあそこで、何か出来ますでしょうか。いつもように普通に、歩いたり、作業したり、この姿勢で、勉強できますでしょうか。普段どおりには何もできませんね。何もできない、けれども祈りの姿勢をとる私は生きている、言い換えると、「何もできない、しかし生きている」これが祈りです。私達が生きている社会は、何かができることで認められ、評価されます。何もできない人間は、あるいはテストの点数が悪い人は駄目な人と見られがちです。そうならないために私たちは勉強しいろいろなことを身につけます。それはとても大事なことです。

しかしもう一つ大事なことは、何もできない、しようと思ってもできない、それでも今私はここにいる、何もできなくても認められるのだ、ということなのです。簡単に言いますと、この「祈り」の「い」は「生命」の「い」です。「のり」は宣言のことです。つまり「祈り」というのは「生命の宣言」なのです。私は何もできない、けれどもそれでも生きている、ということなのです。

一昨年の三月に東日本大震災がありました。その震災によっていろんなことがあったのですが、その一つに安否、生きているかどうか様々な手段で確認しあうことが行われました。なかなか通

じない電話、どうしているのか、生きているのか、と大変心配になりました。それこそ祈りに満ちた思いで、電話が通じる、また直接会う、その時は、「あーよかった」と驚き、感謝し、とても喜んだのではないでしょう。その時は相手が「これができる」「あれができる」から感謝する、喜ぶというわけではありませんね。ただただ「生きています」「それだけでいいのです。それから二年が過ぎました。いつしか、そのようなことが無くなったような感じがします。当り前の日常、当たり前にいる相手、当たり前の自分の生命、そこには何の驚きも、感謝もありません。

そのような中で、「祈り」ということを思い巡らしたいのです。祈りは「生命の宣言」と言いました。それはあの震災直後の「生きています、それだけで十分」という驚きと感謝を持ち続けていく、ということでもあります。震災直後のように、何か大きな声で「あーよかった」、というのではありません。静かに心の中で、目をつぶり、手を組み、『私はたとえ何もできなくても、こうして生きています、生かされている、』ということ味わうことです。

今日の聖書には、「絶えず祈りなさい」とありました。絶えず、というのは、二四時間いつでも、ということではありません。これは『断続的に』ということです。毎日ほんの少しでもいいから、たっ

た一〇秒でもいいから、目をつむり、手を組む時間を設けましょう、ということ。キリスト教は生まれて約二〇〇〇年、西暦はイエスが生まれてから数えていますから、今年で二〇一三年、この祈りを大事にしてきました。この間、実にたくさんの方が祈りました。「祈り」なんて要らない、と言われた時代がありました。今、まさにそんな時代かな、とも思います。願ったことが叶えられない、その通りにならない、ということも実にたくさんありました。しかし、キリスト教は祈り続けてきました。とても大事にしてきました。なぜなら祈りは「生命の宣言」だからです。願いが叶えられなくても、その通りにならなくても、私に悩みがあっても、痛みがあっても、生きていく希望が何も持たなくても、でもこうして今、生きていく、私を超えたおおいなるお方によって生かされている、という驚きと感謝を覚えていくための大事なことです。そのことを覚えて、祈っていきたいと思えます。

「もし信じるなら」

仙台東一番丁教会 保科 けい子

ヨハネによる福音書 第二一章三八節～四四節

38 イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に來られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。39 イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。40 イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。41 人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。42 わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」43 こう言ってから、「ラザロ、出て來なさい」と大声で叫ばれた。44 すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て來た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

聖書の中には、私たちの日常の感覚や社会常識から考えると、絶対に受け入れ難い記事がいくつか記されており、本日の聖書記事「死んだラザロの復活」は、クリスマスの際によく読まれる「おとめマリアからの主イエス誕生」と並んで、誰もが納得しにくい箇所と思われます。その出来事は、ヨハネによる福音書一章の初めから詳しく状況説明がなされており、主イエスが特に親しくしておられたベタニア村のマルタとマリアの兄弟ラザロが病気になるたので、姉妹たちがそれを主イエスに知らせる、というところから始まっています。不思議なことに、主イエスはその知らせをお聞きになってもすぐには行動されず、なお二日間同じところに滞在された、とあります。そして一七節では、「さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。」とあり、ラザロの死が誰の目から見ても確かなものであることが念押しされています。

私は今回、聖書のこの箇所を読んでおまして、以前にもこの記事に強烈に出会ったような思いに捕らわれましたので、確認するために実際に本を開いてみました。『ラザロの復活はどこ？ ソーニヤ、さがし出してくれないか』……ソーニヤはページをめくって、その場所をさがし出した。彼女は手がふるえて声が出なかった。二度も読みかけたけれど、最初の一句がうまく発音できなかった。『ここに病める者あり、ラザロといて、ベタニアの人なり……』と彼女は一生けんめいにやっただけ読んだ。十代の終わりに、ドストエフスキーの作品に傾倒していた頃、『罪と罰』『米

川正夫訳、聖書の引用は文語訳でなされている。)を読んでいて、突然、聖書の話が出てきたので非常に驚いたことがあったのです。「ラザロよ、い出よ、死せし者……」という主イエスの呼びかけに、その御言葉を読んでいるソーニャは、「彼女はさながら自分が、まのあたり見たもののように、感動にふるえて、身内をぞくぞくさせながら、声高く読み上げた。」と反応します。その文章に触れた私自身もまた、背中が寒くなるような感覚を覚えたことを思い出しました。『罪と罰』ではこの聖書の御言葉が、自分自身の身勝手な理屈と貧しさのために、殺人を犯してしまったラスコーリニコフという青年と、困窮の極みにある家族の生活を助けるために、娼婦に身を落とさざるを得なかったソーニャという若い婦人、いわば二人の「死せし者」の新生を指し示す道標となっています。今思えば、これが私と聖書の最初の出会いだったのです。ソーニャが読む聖書の御言葉は、四十数年にもわたって私自身の中に刻みつけられていました。

ところで、私がキリスト教という宗教に最初に触れたのは、高校一年生のときに学内の読書感想文コンクールで入賞したために、その年の課題図書であった『沈黙』（遠藤周作著）についても感想文を書くようにと現代国語の教師から指示され、いわば無理矢理にその本を読まなければならなかったという体験をしたときです。江戸時代のキリシタン禁制という背景の下に描かれたその作品は、とても暗く重いので途中で読むのが辛くなりました。そこで語られている「基督教」

や「神」や「基督」は、私には捉えがたく理解し難いものでした。今思い出せるのは、ロドリゴという主人公らしき若い司祭と、彼に棄教を勧める彼の尊敬する師のフェレイラ、自分自身の弱さに耽溺しその中で開き直るという人物設定をされているキチジローの三人、それに奉行所の中庭での陰鬱な踏絵の場面です。今、読み直してみると、「うすよこれた灰色の木の板に粗末な銅のメダイがはめこんであった。それは細い腕をひろげ、茨の冠をかぶった基督のみにくい顔だった」と描写されています。ロドリゴが足をあげた瞬間、彼の足は鈍い重い痛みを感じます。そのとき、踏絵のなかの基督が、「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かつたため十字架を背負ったのだ。」と語りかけるのです。「こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた。」聖書を真剣に読み出してからの私ならば、この文章が福音書に記されるペトロの裏切りを背景にしていることがよく分かります。しかし、当時の私には、心の奥底を見透かされているような嫌な感覚だけが残りました。それは聖書の御言葉が、一つの文学作品の中で、日本人の読者の感性に訴え心に染み込んでいくようにと、作者によって解釈されて変容してしまった、ということなのかもしれません。

それら二つの私自身の思い出を振り返ってみた時に、気づかされることがあります。『罪と罰』

の中では、聖書の御言葉そのものを読む者がおり、それを真剣に聴く者がいる、ということですが。それはまた、一九世紀の半ばに、作者ドストエフスキー自身が御言葉を真剣に読みそれに深く聴いていた、ということを示しているように思われます。そして、その御言葉の力を正確に他者に伝えるには、御言葉そのものを記す以外に術がない、ということに彼自身が気づいていたのではないか、ということですが。私たちは、この世の常識といわれるものや固定観念、自分自身の価値観などからなかなか自由になることはできません。しかし、ヨハネによる福音書一章三八―四四節に記される「ラザロの復活」という荒唐無稽とも思われる記事は、決して人間の知恵や常識などで解釈し説明することができない不思議な出来事が、確かにそこで起こっていることを宣べ伝えていっているのです。ヨハネによる福音書の著者は、そのような形で、あえて私たち人間の生きている領域のなかでは誰もが信じることが困難な死者の復活の出来事を、私たちに正面から提示しています。そして、主イエスはまさにそこで、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と、私たちにも問いかけられています。やがて、主イエス御自身が十字架におかかりになり、亡くなられて葬られ、三日目によみがえられる、という出来事が起こった時に、主イエスを信じている者にも、主イエスを信じていると自認している者にも、この問いかけはさらに深くなされていくこととなります。

コリントの信徒への手紙一、一章二節には、「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」と記されています。私自身もまた、宣教によつて、「もし信じるなら、神の栄光が見られる」という主イエスの御声を聴き、信じる者とされて新しく生かされ、主イエスに身を委ねて歩み出した者の一人です。ですから、今日もこのようにして御言葉を宣べ伝えています。キリスト教の二千年の歴史は、そのようにして新たに作られ続けているのです。皆様方も、今この礼拝の場において、その生きた歴史に触れていることを是非覚えていただきたい、と願います。

「新しく生きる」

東北学院中学校・高等学校 宗教主任 松井浩樹

ヨハネによる福音書 第二〇章三二節～四二節

31 ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。32 すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」33 ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒流したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」34 そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。35 神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廢れることはありえない。36 それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒流している』と言うのか。37 もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。38 しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、

あなたたちは知り、また悟るだろう。」³⁹そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

40 イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行つて、そこに滞在された。⁴¹多くの人がイエスのもとに来て言つた。「ヨハネは何のしるしも行わなかつたが、彼がこの方について語つたことは、すべて本当だつた。」⁴²そこでは、多くの人がイエスを信じた。

昨年、大きな震災を経験した私たちは、復興元年といわれる新しい希望の年を迎えました。今年もよろしく、というところでありますが、今年度、五月、教室から始まつたこの夜間主礼拝も、今日と来週を残すのみとなりました。私が担当する礼拝も、今日で最後となります。特に四年生の皆さんにとっては卒業前の礼拝でありますし、またその他の皆さんも、今の学年での最後というところであります。先ほどの卒業式に歌う讚美歌を選ばせていただきました。これまでの学生生活、あるいはこの一年を振り返つて、よい締めくくりの時としていただきましたと思います。

さて今日の聖書記事は、主イエスが「石で撃ち殺されかける」話です。生きている人間をそのまま、集団で死ぬまで石を投げつけるのですから、ひどい刑罰です。しかも、私たちが想像する以上に長

い間、日常的に行われていたようであります。特に、ローマ帝国による大迫害時代にはキリスト教を信じると主張する相当な数の人たちが、石うちの刑に処せられたことが知られています。

聖書によりますと主イエスは「ユダヤ人」に囲まれ、殺されかけると記されています。しかし、以前まではいわゆる律法学者であるとか、ファリサイ派という固有名詞が使われているのに、「ユダヤ人」とありますから、その他大勢の群集たちも、その主イエス迫害に加わったことが伺えます。

ではなぜ、主イエスは石で撃ち殺されることになったのでしょうか。表向きの理由は一つです。「神を冒涇した」ということです。「神を冒涇する」とは「神をないがしろにする、神を汚す、神を馬鹿にする」といった意味になるでしょうか。主イエスは、確かにそれらしいことは発言されます。例えば「私を見たものは神を見たのだ」「私の声を聞いたものは神の声を聞いたものだ」……という発言です。しかしながら、神の冒涇にはならないことを、主イエスは聖書を丁寧に着用しながら、説明するのです。

その一方で、多くのユダヤ人たちは、あの、貧しいナザレ村出身の大工のイエスが、救い主である、神であるということが、どうしても信じることができなかつたのであります。いや、信じることができなかつたというよりはむしろ、主イエスの存在そのものを認めたくなかつたのであります。そこに大きな摩擦が起こり続けた結果、今日の記事のようなことが起こりえたのであります。

現代を生きる私たちも、救い主であるとか、神という存在を想像する時、立派な神を想像すると思います。当たり前であります。私たち限りある人間を超えている何かがあるからこそ、神という存在となりえるわけですから…

しかし残念ながら、主イエスはその、私たちが普通に抱く「神」というイメージではないのです。育った所も、決して都会とはいえない、むしろ差別と偏見で苦しむ人々が多くいるナザレという貧しい村でした。主イエス自身、特別な教育をうけているようには思えません。さらに、聖書に記されているような伝道活動をする前は大工の仕事を細々と続けて、家族を養っていたのです。そして今、大勢に囲まれて石で撃ち殺されようとしている…最後はついに、十字架刑で殺されていくのです。

ここでの大きな問題は、自分のイメージ、自分の考えとは違う。それが全面にでていくということです。私たち人間は時として、自分のイメージ、自分の考えとは違う人を敵とします。そして、時に、無視をしたり、悪意をもったりする、ついには「殺人」という行為までもエスカレートする凶暴さを私たちは一人ひとりが持つていることを知らされるのです。

今日の結論です。たしかに普通に考えるなら、聖書にあるように、主イエスは救い主とは考えにくいでしょう。それは、私たちの神に対するイメージがあるからです。それは、神が超越的で、人間を越えた偉大な存在としてのイメージがあるからにはほかなりません。ところが聖書が語る救い主は、

まったく逆で、一言で言うなら私たちがクリスマススの時、知りえたように「人としてお生まれになった神」であるのです。私たちの足元にまで下られた神なのです。したがって、私たちの痛み・悲しみ・すべてをご存知でおられる神であって、誰一人もれることなく、救いの対象となる、というように、救いの順序が他の宗教と全く逆であるのです。

人としてお生まれになったゆえに、私たちの痛み・悲しみ・すべてをご存知であられる、上からではなく下に下られた神であるのです。何気ない言葉かもしれませんが、「私たちの痛み・悲しみ・すべてをご存知であられる」、これほど広く、深い慰めの言葉があるでしょうか。神が我々、一人ひとりを今なお、この礼拝にて受け止めてくださっている。そういう思いから、私たちは初めて前のものへ目を向けることができるのです。

新しい二〇一二年が始まりました。しかし、今年度はお別れであります。神が私たち、一人ひとりを常に受け止めてくださっていることを覚えたいと思います。また、だからこそ私たちは卒業しても、学年が進級しても、この東北学院に連なるがゆえに日々、新しく生きていくのであります。

祈り 私たちのすべてをご存知であられる主なる神、今日も新しい命を与えられ、礼拝をささげられます幸いを感謝します。私たちの東北学院での営み、すべてを祝福して下さいまして、これが

からも私たちが前を向いて、懸命に歩むことをさせていただきますように。この祈りを、主の御名によって祈ります。アーメン。

「希望の光」

東北学院榴ヶ岡高等学校 宗教主任 西間木 順

ヨハネによる福音書 第一章四～五節

4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

先週と今週の私の高校一年生の授業で、海外研修のビデオを見せたのであります。私自身、昨年この海外研修に引率しましたので、当時のことを思い出しながら、見ていたのであります。「この研修の中で一番思い出に残っていることは何か」と聞かれたら、たくさんある思い出の中で、「土ポタル」を見たことを挙げるのであります。暗闇の中に光る、たくさん土ポタル。暗闇の中にたとえ小さくても光があると、何か安らぎが与えられるのではないのでしょうか。

夜、家が停電になると、本当に不安になります。しかし、一本しかなくても、ろうそくの小さな灯が、その不安を取り除いてくれるのではないのでしょうか。そういう経験はだれにでもあるのではないのでしょうか。

私たちの生き方においても、同じではないでしょうか。おそらく、皆さんも、不安を抱えているのではないのでしょうか。榴ヶ岡高校の生徒は試験前になると、不安になります。このままで進級できるのか、という不安を持つのであります。大学三年生ですと、そろそろ就職活動が始まるのではないかと思います。それに対する不安。人はそれぞれがいろいろな不安を抱えています。不安を消すために、誰かとつながってみたい。そう思うこともあるのではないのでしょうか。しかし、それでは不安をかき消すことができないのであります。不安が不安を産む。不安が大きくなってきましたと、どうすればいいかわからなくなってきました。そうしますと、どうしても一步を踏み出せなくなってしまうのではないのでしょうか。どう生きればいいのか、わからなくなってしまう。まさに暗闇の中に生きているようなものであります。どこに希望を置けばいいのか。生きる力さえも失ってしまうかもしれません。

私の高校時代の後輩が、病気にかかりました。彼には、病気の後遺症が残ってしまいました。そのため、仕事を辞めざるをえなくなってしまったのであります。彼は、不安で、不安で仕方がない。まさに暗闇の中で、もがいている状態であります。不安でどうしようもなくなってしまう時に、私にメールをくれるのであります。彼は、敬虔な仏教徒ではありますが、聖書の言葉を求めてくるのであります。聖書に書かれてある言葉によって、自分が慰められることを知っている

のであります。

今日与えられた聖書の箇所、「言の内に命があつた。命は人間を照らす光であつた。光は暗闇の中で輝いている。」とあります。神の言に命がある。そして、この命が、私たちに命を与えてくださっている。生きる力を与えてくださっている。それだけではなく、暗闇の中で生きていような私たちを、その光で、照らしてください。その光に照らされている私たちから、不安を取り除いてくださっているのです。ですから、私たちには、もはや不安はないのであります。

私の後輩は、そのことを、この東北学院で学んだのであります。悶々としている暗闇の中にいる自分が、命の光で照らされている。その輝いている光を、希望の光であることを学んだのであります。

先日の河北新報に、「神戸市のガス灯『一・一七希望の灯り』 大槌にともる」という記事が掲載されました。お読みになった方もおられるのではないのでしょうか。その記事には次のように書かれていました。

「阪神大震災の犠牲者を追悼する神戸市のガス灯『一・一七希望の灯り』の火が、東日本大震災から一年八カ月の一日、岩手県大槌町に届いた。先に神戸から分けられた岩手県陸前高田、福

島県南相馬両市の火も大槌町に運ばれ、四つの被災地の『希望』が一つの灯りとなってともされた。大槌町町長は『被災した町民が苦しくなった時に訪れ、希望を抱ける場所になれば』と話した。」

この東北学院では、不安になった時に、苦しくなった時に、何が希望の光になるのかを教えてください。神の言が希望となる、希望の光、希望の灯りとなることを教えているのであります。この希望の光によって、私たちは慰められ、生きる力が与えられているのであります。

キリスト教の暦では、来週で一年が終わります。そして、十二月より新しい一年が始まるのであります。そして、クリスマスを迎えるのであります。クリスマスは、そのことを知る時なのであります。神の言の内に命があり、この命が、光となって、私たちの心の中で輝く、希望の光となっていることを知る時なのであります。

祈り

父なる神様

新しい命を与えてくださり、この大学へと招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え、共に礼拝をささげることができまことを感謝いたします。

私たちが、あなたのみ言葉を心に刻み、あなたを信頼し、あなたに従う歩みができますように。

そして、未だ困難な状況の中で、生活をしている人のために、地の塩、世の光として働くことができませんように。

この場におりません友のために祈る心を与えてください。

すべてのことを当たり前だと思うのではなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。

この祈り　主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

『誰が』そして『誰に』

宗教部長
佐々木 哲夫

イザヤ書、五三章一節〜五節

1 わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。

主は御腕の力を誰に示されたことがあるうか。

2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように

この人は主の前に育った。

見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

4 彼が担ったのはわたしたちの病

彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに

わたしたちは思おもっていた

神かみの手てにかかり、打うたれたから

彼かれは苦くるしんでいるのだ、と。

5 彼かれが刺さし貫つらぬかれたのは

わたしたちの背そむきのためであり

彼かれが打うち砕くだかれたのは

わたしたちの咎とがのためであった。

彼かれの受うけた懲こらしめによつて

わたしたちに平和へいわが与あたえられ

彼かれの受うけた傷きずによつて、わたしたちはいやされた。

ヨハネによる福音書、第一章一四〜一八節

14 言ことばは肉にくとなつて、わたしたちの間に宿やどられた。わたしたちはその栄光えいこうを見た。それは父ちちの独ひとり子ごとしての栄光えいこうであつて、恵めぐみと真理しんりとに満みちていた。15 ヨハネは、この方かたについで証あかしをし、声こえを張あり上げて言いつた。「『わたしの後あとから来こられる方かたは、わたしより優すぐれて

いる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。』¹⁶わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。¹⁷律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。¹⁸いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

*

礼拝堂に飾られているローソクやツリーは、イエス・キリストの降誕を祝うクリスマスMASの時を告げています。約二千年前の人物である洗礼者ヨハネも、イエス・キリストの降誕を告げています。本日開きました新約聖書ヨハネ福音書一章一五節に彼の告げた言葉が記されています。

ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。

洗礼者ヨハネは、イエス・キリストについて、二つのことを証言しています。その第一は、『わたしの後から来られる方は、わたしよりも先におられた』という不思議な証言です。洗礼者ヨハネの父親はザカリヤです。ザカリヤに天使ガブリエルが現れて、彼の妻エリザベトに男の子、つまり、洗礼者ヨハネが与えられることを告げます。やがて、その言葉通り、ザカリヤの妻は子を宿します。その六ヶ月後、天使ガブリエルは、ナザレの町にいたマリアにも現れます。そして、マリアにも男の子が与えられることを告げます。イエス・キリストの誕生を告げるいわゆる受胎告知です。

エリザベトとマリアは、親戚関係ですから、彼女たちの子供も親戚関係になります。すなわち、洗礼者ヨハネとイエス・キリストは、年齢が半年違いの、小さいときから互いに良く知っている仲と思われます。無論、洗礼者ヨハネがきつちり半年年上です。その洗礼者ヨハネが、イエス・キリストの到来について「わたしの後から来られる方は、わたしよりも先におられた」と証言したのです。「後」とか「先」という表現は、時間的な意味を込めての表現ですから、まことに不思議です。というのは、イエス・キリストがマリアの胎内で人間として形造られる以前から、すでに存在していたという証言になるからです。人としてこの世に到来する以前において、既に、イエス・キリストは、存在していたというのです。

若干、話の内容を整理したいと思います。イエス・キリストという名前は母マリアの胎において人として形造られた存在を指しての名前です。他方、人となる以前に存在していたイエス・キリストを、イエス・キリストと呼んでは混乱しますので、福音書は、一四節で「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」と説明しています。すなわち、イエス・キリストの到来は、永遠の存在者である言がこの世界に到来した出来事、無限の世界が有限の世界である私たちの歴史に入り込んできた出来事であると証言しているのです。

洗礼者ヨハネが、イエス・キリストについて告げた第二のことは、「わたしの後から来られる方は、わたしより優れている」という証言です。洗礼者ヨハネは、決して、優れていない人物ではありませんでした。マタイ福音書に「エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた」（三・五六）と記されているとおり、洗礼者ヨハネは人々から絶大な支持を集めていたのです。むしろ、優れた人物だったのです。その彼が「わたしの後から来られる方は、わたしより優れている」と証言したのでした。

ヨハネ福音書は、イエス・キリストの優れていることを一四節でさらに具体的に「恵みと真理とに満ちていた」と説明しています。恵みは、慈悲もしくは慈善と言いましょか、優しく慈し

むことであり、まさに平和の状態を意味します。しかし、それは、真理をともなつてのことであると語られています。真理は正義でもありますから、平和と正義が両立する出来事、それがイエス・キリストの到来において実現すると証言されているのです。

さて、ヨハネ福音書は、イエス・キリストの到来について、「言葉が肉となつて、私たちの間に宿られた」と表現し、永遠の昔から存在する方であつたことを明らかにしました。永遠の昔から存在する方ですから、その方の到来を、旧約聖書の預言者たちも、同じように、待ち望んでいました。しかし、預言者たちは、かなり昔のことですから、洗礼者ヨハネのようにはつきりと目に見える形でその到来をイメージできたわけではありません。むしろ、言がこの世に肉をまもつて到来する姿を、別のイメージをもつて預言しました。

例えば、本日、開きましたイザヤの預言がそれです。イザヤは、イエス・キリストの到来を、栄光に輝く姿ではなく、真逆の姿をもつて表現しました。すなわち、苦難を受ける僕の姿として預言したのです。

²乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。³彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

新約聖書の人々にとって、このイメージは、イエス・キリストの十字架の出来事として、目に見える形で実現するのですが、預言者イザヤにとってのイメージは、それほど明瞭となりませんでした。しかし、苦難する僕の姿は、イエス・キリストの十字架の姿を、それとわかるように示していたのです。

⁴彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだ、と。⁵彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち碎かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

預言者イザヤは、イエス・キリストの十字架が、恵みと真理の実現、平和と正義の実現であることを言い当てていたのです。

さて、現代に生きる私たちは、イエス・キリストの到来から二千年後の時代に生きています。新約聖書も旧約聖書も手にしており、しかも、母国語で詳細に読み取ることができる自由な時代に生きています。その私たちに、イザヤの預言の言葉は、かすむこともなく、消し去られることもなく、むしろ、鋭い力をもって問いかけてきます。その問いとは、イザヤ五三章一節「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるうか」です。

もう少し直訳しますと、次のようになります。最初の問いかけ、「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか」は、「誰が、わたしたちが聞いたことにアーメンというか」です。アーメンという言葉が使われているのです。アーメンは、本当だ、確かだ、信頼するという同意表明の言葉です。第二の問いかけ「主は御腕の力を誰に示されたことがあるうか」は、「主ご自身の働きが誰の上に具体化されたか」です。「誰が」という疑問詞は、念押しのような問いかけですから、さらに分かり易く言い換えをしますと、次のようになります。

わたしたちが聞いたことをみんなに知らせたが、それにアーメンという者は、いないかもしれない。しかし、わたしたちが聞いたことは、確かであつて、信賴できることなのだ。

神の力が、この人に表れたと思えないかもしれないが、他でもない、この人に主の御業が表れたのだ。

永遠に存在する言が肉をまとい、時空の制約を受ける私たちの歴史のなかに到来した出来事が、クリスマスです。アーメンとの言葉をもつて受け入れたいと思います。

「今日を存分に生きよう」

大学宗教授主任 野村 信

ガラテヤの信徒への手紙、第五章一節

「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりとしなさい。奴隷の轡に二度とつながれてはなりません。」

富山県にお住まいの青木新門さんという方は納棺夫という仕事をされておられました（遺体をお棺に納めるといふ仕事ですが）、二〇年ほど前に、『納棺夫日記』という本を出版されました。この話は「送人」といふ題名の映画で上映され、「納棺夫」といふ仕事が一躍人びとの間で知られるようになりました。

映画では触れていない大切な話が本の中に語られています。それは、人びとが亡くなって行く時に青木さんが感じた話です。人は、死ぬ直前になると「お光の世界に入る」と言っています。世界が輝き始めるということです。世界が明るく見えてきて、ありがとう、ありがとうと言って死んでいくということです。

死に往く人々については、世界中にいろいろな話が残っていますが、やはり、有名な話は、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』に出てくるゾシマ長老のお兄さんです。短気で苛立ちやすい、無神論者であった若きお兄さんが、死の数日前から、世界が光り出して、次のように話す場面があります。

そう、ぼくのまわりにはこんなに素晴らしい神の栄光が満ちていた。鳥たち、木々、草原、空。なのにぼくだけが恥辱の中で生きていて、ひとりずつと万物を汚し、美しさや栄光にまったく気づかずにいたんだ。(光文社版、亀山郁夫訳より)

無神論で冷笑的な兄が、突然、世界がとても美しく、明るいことに気付いて、感謝と喜びの内面に死んでいく場面です。死の直前になって、身の回りの小さな一つひとつのものの中に、掛け替えのない大切なものがあることに気付いて、終わりを迎えたのです。

ベストセラーになった『ソフィーの世界』を読んだ人もいると思いますが、そこにも、ソフィーのお祖母さんが、自分の病気を告げられたその日に、「人生はなんて豊かなのでしよう。今ようやくわかった」という言葉が出てきます。

人間は、いつかこの世界にさようならをしますが、それがはつきりすると、急に世界が美しく光って見えるということです。それは、ある意味で当然かもしれないかもしれません。もう二度と見られないと思うと、すべてが新鮮で、掛け替えのないものとして眼に映るというわけです。しかし、それなら、本来、一日一日はもともと大切な一日であり、輝いているものなのではないでしょうか。

ならば、大事なことに気付かなければなりません。私たちは非常に素晴らしい世界に住んでいるということなのです。若い、元気な時からそのことに気づいたら、私たちはどんなに良いことでしょうか。死が近づいてようやく気付くのでは遅すぎるのです。今、元気に生きている内に、一日一日が素晴らしい、掛け替えのない日であると気づくと、私たちはもっと充実した毎日が過ごせるはずです。

そこで、どのようにしたら、若いうちから生きていることの素晴らしいさを感じ、毎日を充実して過ごせるのでしょうか。

それは、世界はなんとなく存在しているのではなく、自然に発生したのもなく、神が目的をもって造ってくださり、私たち一人ひとりに命を与えてくださっているということに気づくことです。そのことに気付くと、私たちの人生は大切なものであり、誰にでも自分の目標があることがはっ

きりして、どのように生きるべきかが明確になります。

さらに、神が世界を造つてくださったということを受け入れるなら、世界はともいいものである、素晴らしいものであるということに気づきます。なぜなら、どの一つをとつても神の手垢てあか、痕跡こんせきが残っていないものはないからです。すべての物質・存在物には、神の息が吹きかけられていて、神の面影を宿しています。

文学も、美術も、音楽も、彫刻も、哲学や思想も、科学も技術も、貨幣経済も、政治であろうと、法律であろうと、医療も福祉も、どれもみんな素晴らしいものです。私たちはその真理や法則を発見し、生活に役立てていくことが出来るのです。神は私たちにこの世界を探究し、十分に活用するようにと私たちに与えて下さっています。

確かに私たちの毎日には、強盗や殺人もあるし、病気も事故も起こるし、戦争もあれば、飢え渴くこともある世界ですが、しかし、生きている日々は掛け替えのない、素晴らしいものとして与えられています。

その素晴らしい一日をしっかりと味わいなさい、と神は、私たちに「今日」を提供して下さっています。今日という一日は、もはや永遠に過ぎ去って二度と回復しない一日ですから、しっかりと掴つかみ、完全に味わい、燃焼して過ぎしなさいと私たちに与えられています。

今日は、たくさん勉強があるから嫌だなと思った時に、すでに私たちは勉強の奴隷です。今日は辛い仕事がある、と思った時に、私たちは仕事の奴隷です。雑用がいっぱいあって、うんざりだ、と思うなら、雑用の奴隷にされています。では、逆に、仕事も勉強も雑用も、嫌なことは全部放り出して、楽しく遊び、ダラダラしていたいと言うなら、今度は、遊びやレジャー、怠惰の奴隷になってしまいます。

そうではなく、今日いかにたくさんすべきことがあるうとも、掛け替えのない一日を私は存分に生きよう、今日一日の主人は私なのだ、と自覚する時、私たちは勉強の奴隷でもなく、仕事の奴隷でもなく、今日一日の主人なのです。

さきほどお読みしました聖書には、「自由を得させるために、キリストは私たちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の軛くわに二度とつながれてはなりません」とあります。

ここで言われている奴隷とは、戒め、律法の呪いによって奴隷になってしまった人間たちの様子をパウロは論じていますが、現代においても私たちはあらゆるものの奴隷になり、そこから抜け出せなくて、苦しんでいます。

そこから解放されるために、キリストは私たちをあらゆる奴隷状態から解放してくださいましたので、今日すべきことを喜んで行い、積極的に生きること、今日という一日の主人になる、すなわち、私たちは自由人として生きることになる、と言い換えることが出来ます。

それぞれの今日という一日を、存分に、心行くまで、満足して過ごしましょう。たくさん勉強、仕事、雑事があるうとも、それらを喜んでこなしながら、「私は、私の今日を存分に生きる」、「今日という一日の主人は私なのだ」という姿勢をもって、一日を過ごしましょう。

このような充実した毎日を積み重ねていくことが、実は今、若いうちから、お光の世界を歩んでいくこつであり、しかも、日々この美しい毎日を下さった神に感謝して生きていくことなのです。

「私はあなたと共にいる」

大学宗教授任 北 博

創世記二八章一〇～一六節

10 ヤコブはベエル・シエバを立つてハラシムへ向かった。11とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあつた石を一つ取つて枕にして、その場所に横たわつた。12すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かつて伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上つたり下つたりしていた。13見よ、主が傍らに立つて言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわつているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。14あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がつていくであらう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によつて祝福に入る。15見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行つても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ歸る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

16 ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」

ヤコブは、父を欺いて自分の兄から長子としての祝福を奪い取り、その結果身の危険を感じて逃亡します。ところが荒れ野をとぼとぼ旅するうちに、すっかり日が暮れてしまいました。ヤコブは疲れ果て、そこにあつた石を枕代わりにして、倒れるようにその場に眠り込んでしまいました。その当時のパレスチナには、ライオンもいればオオカミやクマも出ました。ヤコブはおそらく、自分が果たして朝まで生きているかどうかさえ、確信が持てなかったことでしょう。しかし、こんなことになったのも自業自得で、誰を恨むことも出来ません。ヤコブの心の中は、おそらく後悔の念とともに、暗い絶望が支配していたことでしょう。

そしてヤコブは、夢を見ます。夢の中で天と地をつなぐ階段があり、御使い達が上り下りしており、気がつくくと神が傍らに立っていました。そして神はヤコブに、「私はあなたと共にいる」と言います。夢から覚めたヤコブは、神が自分と共に旅をしてくれていることを知り、力を得て困難な旅を続けるのです。

この場面を題材にした讚美歌「主よ、御許に近づかん」は、タイタニック号が沈没する直前に

船内に取り残された人々によつて歌われた、とされる讚美歌です。少なくとも私はそのように小さい頃から父に聞かされてきましたが、どうもこれには諸説あつて、はっきりしたことは分らないようです。タイタニック号が沈没したのは一九一二年四月一五日未明のことでしたから、二〇一二年は丁度その百周年にあたります。そこでタイタニック号にゆかりの場所などでいろいろ記念行事が行なわれているようですが、先日BSの「旅のチカラ」という番組の中で、犠牲者の共同墓地がある事故現場から近いカナダのハリファックスで行なわれた追悼コンサートの模様、ミュージシャンの細野晴臣さんのレポートで伝えられました。実は細野晴臣さんの祖父細野正文氏は、日本人唯一の乗客で、この時救命ボートで脱出して救助されていたのです。

タイタニック号には、八人の音楽家が乗船していました。豪華客船で多くの有名人や金持ちの前で演奏する仕事ということで、将来の成功を夢見る大勢の若手音楽家達の応募があつたらしいのですが、採用されたバンドのメンバー達は、バンドマスターで最年長のウォレス・ハートリーでさえ三三歳という若さだつたそうです。因みに彼は、乗船の直前に或る女性と婚約していたそうです。きつと八人の若手音楽家達は、それぞれ大きな希望を膨らませて乗船したことでしょう。しかしタイタニック号は、出航して数日後に冰山との接触事故を起こしてしまいます。生存者の目撃証言によると、浸水し始めてパニック状態に陥つた乗客達を落ち着かせようと、八人の音楽

家達は甲板で演奏を始めました。もちろんそれを聴いている乗客など、誰もいなかったことでしょう。しかし八人は、避難もせずに黙々と演奏を続けました。真相は明らかではありませんが、通説によると彼らが最後に演奏した曲は「主よ、御許に近づかん」だった、と言われています。

演奏中の彼らの心中には、何が去来していたのでしょうか。残して来た家族のこと、恋人のこと、あるいはこれまでの自分の人生のこと、様々な思いが走馬灯のように飛び交っていたのかもしれない。確かに聴衆は誰もいませんでした。しかし最後に「主よ、御許に近づかん」を演奏していたしていた時、彼らは神がこの上もなく身近にすることを実感したに違いありません。それは彼らにとつて、一世一代の演奏会でした。彼らはこの時、自分が音楽家の道を歩んだのはまさにこの瞬間のためであることを確信したことでしょう。

結局この八人は最後まで船に残つて犠牲となり、その後ハリファックスの共同墓地に埋葬されました。この逸話は、私達に生きることの意味について考えさせます。私達はそれぞれ将来について、何らかの願望や期待、野心を抱いています。しかし神は、私達が思っているとは違う形で私達を用いることがあるのではないのでしょうか。予期しない召命があった時、それが自分の考えていたものとは違ったものであったとしても、すぐ従つて行けるような心の準備だけはしておきたいものです。

聖書のことには話を戻します。ヤコブは決して尊敬すべき立派な人物ではありません。性格的問題性や弱さをいろいろ抱えていました。それにもかかわらず神は、絶望のどん底にあつた彼に「私はあなたと共にいる」と約束したのです。その後もヤコブは相変わらずいろいろと問題を起しますが、神は約束通りヤコブを見捨てず、しっかりとその御計画の中に彼を用いて下さいました。ところで、なぜ神はヤコブにそこまでしてくれたのでしょうか。ひよつとして神は、ヤコブがどこか見どころのある人物だと見抜いたのでしょうか。いや、どうもそうではないように思います。むしろ神は、このような欠けの多い人間をも見捨てず、私達には想像も出来ない御計画に従つて用いて下さるのではないのでしょうか。大切なのは、そのような呼びかけに答え、従つて行くことです。

「心に立ち返れ」

大学宗教授任 出村 みや子

ルカによる福音書、第一〇章三八〜四二節

38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。39 彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。40 マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせています。何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」41 主はお答えになった。「マルタ、あなたは多くのことにおもひ悩みに、心を乱している。42 しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

夏休み明け最初の授業を行ったクラスで出席を取りながら、学生にどんな夏休みだったかを一言ずつ言ってもらいました。主に一年生が出席するクラスでしたので、大学最初の夏休みをどの

ように過ごしたのか興味があつたからです。自動車学校に通つて免許をとつた学生、友人や家族、あるいは一人旅といった学期中にはできない体験をした学生、サークルやアルバイト、美術館巡りなど夏休みを有効にアクティヴに過ごした学生が多い中で、取り立てて何もしなかつたという学生も何人かいました。彼ら、彼女らはそれぞれ夏バテでした、引き籠つてました、あるいはオリンピック中継に熱中しすぎて昼夜逆転し、生活リズムがすっかり狂つて昼に何も活動できませんでした、など言い訳めいたことを言つたのですが、むしろ普段と変わらず平常心で日々を過ごしていました、と語つた女子学生もいて、それぞれの夏休みを垣間見せてもらいました。

ちょうど教会史の中のアウグスティヌスを取り上げる授業だったこともあり、活動的な生活だけでなく、何もしない引き籠りも時に人生には必要なことを示すために、アウグスティヌスの書いた『告白』という著作の一節を紹介しました。それはアウグスティヌスが真理を探求している場面で、真理はどこに存在するか、と問うた有名な箇所です。彼はそこで、「真理は心の最も奥深くにおいて味わわれる。しかるに心はそこからさ迷い出てしまった。道を踏み外した者たちよ、心に立ち返れ。汝らを創造した方に依りすがりなさい」(W.12:18)と述べています。アウグスティヌスは他の箇所でも繰り返し返し「心に立ち返れ」と読者に告げているのです。

「心に立ち返ること」、このことはキリスト教主義を建学の精神とする本学の大学礼拝において

も重要であると思います。今日選びました聖書の箇所は、主イエスが親しく関わったマルタとマリアという名の二人の姉妹の話で、「心に立ち返る」ことの大切さを教えてくれる箇所のひとつです。簡潔な表現ながら、当時の情景が生き生きと私たちの心に迫ってくる物語です。マルタとマリアの住む家に主イエスがおいでになった。出来る限りのもてなしをしようと心を砕くお姉さんのマルタに対して、部屋に入ったイエスの足元に座って何もせずに語られる言葉にじっと耳を傾ける妹のマリアのいる場面の対比が大変印象的なのですが、こうした場面は大切な来客を迎えた家庭の日常の光景としてわたしたちの記憶にも残っているのではないのでしょうか。みなさんはかつて、幼稚園や小学校時代にあった家庭訪問の日や特別な来客があった日のことを思い出しませんか。

この対比的な二人の姉妹が登場する場面は他にもあります。ヨハネ福音書十一章に収録された、有名な「ラザロの死と復活」の物語では一章二〇節で「マルタはイエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた」と語られています。またヨハネ一二章の有名な「ナルドの香油」の物語にも、「イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた」と活動的なお姉さんのマルタについて語られる一方で、マリアの方はその後高価な香油の入ったナルドの壺を持って来て、主イエスの埋葬の準備のために黙ってその足に香油を注いでいます。こ

のように福音書の幾つかの場面において二人の性格がはっきりと描き分けられていますので、そのためにこの二人の姉妹については古来よりしばしば対照的な女性像の典型として語られてきました。マルタが積極的な行動派の女性であるのに対して、マリアは物静かなタイプの女性であると。実際にこの物語は西欧中世世界では活動的な実践的生である *Vita activa* と、観想的生 *Vita contemplativa* を対比したアレゴリーとして理解されるようになりました。

男女平等が進む現代社会にあつては、来客のもてなしは必ずしも女性の役割ではなくなりつつありますが、イエスの時代のユダヤ社会においては、大切な来客の接待は、かつての日本のように女性の役割とされてきました。「多くのことに思い悩み、心を乱している」ことを指摘されたマルタの姿は、ストレスに満ちた忙しい日々を生きる現代の私たちにも通じるところがあります。その意味でマルタは世の常識や規範を重視する生真面目な女性であつたのでしょうか。しかし妹のマリアは、大切な客人の接待という、当時の女性に期待されていた役割を放棄してまで、ただイエスの足元に座つてそのみ言葉に聞き入る姿勢を崩さなかつたのです。このひたすらなマリアの姿勢は私たちの心を打つものですが、しかし生真面目なマルタはどのような妹の常識はずれな態度を許すことができず、思わず主イエスにまで不満をぶつけてしまいます。「主よ、私の姉妹は私だけにもてなしをさせていますが、何ともお思ひになりませんか。手伝つてくれるようにおつ

しゃってください」と。これは私たちの日常によく聞かれる表現ではないでしょうか。

「がんばる」は時に「我を張る」に通じ、がんばっている人は往々にしてそうでない他の人を非難しがちです。自分はこんながんばっているのに、どうして周囲の人は協力してくれないの、という訳です。このように取り乱したマルタに対して主イエスは優しく語りかけます。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ、それを取り上げてはならない」と。このイエスの言葉は決して叱責の言葉ではなかったでしょう。おそらくは「良い方を選んだ」と言われたマリアにとつてばかりか、忙しさに自分を見失いそうになっていたマルタ自身にとつても主イエスの優しい言葉は、自分の心に立ち返り、周囲から期待されていた役割から解放される自由への招きとなったことでしょう。

今日の聖書を読むうちに、かつて私が大学生だった時の大学礼拝の中で一人の牧師が、「忙しくて祈らずにいられない」という題で話されたことを思い出しました。日本語で「忙しい」という言葉は動詞の「いそぐ」に由来し、漢字で（立身偏の）心を亡くすと書きます。確かに忙しい日々を送る現代日本社会の中で、すぐにキレル人や心の病にかかる人が増えています。その後クリスマスチャンとなって、この牧師の言葉の意味が次第に良くなるかかってきました。信じる者は時間的余裕

があるから礼拝を大切にし、日々祈る生活を続けているのではないのだということです。むしろ多くの社会的責任を負う忙しい日々の中で、「しかし必要なことはただ一つである」という主イエスの言葉に立ち返ることで初めて自分を取り戻し、他者をも思いやることができるということを知っているのです。

これからの皆さんのキャンパスライフにおいて、忙しさに自分を見失いそうになった時、心が疲れた時、どうぞパイプオルガンの音に癒され、「心に立ち返る」静かな時がキャンパス礼拝において備えられていることを覚えていただきたいと思います。

「彷徨い出た魂が見出されるとき」

大学宗教学主任 村上 しみか

ルカによる福音書、第一五章一〜七節

1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄つて来た。2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言い出した。3 そこで、イエスは次のたとえを話された。4 「あなたがたの中に、百匹の羊を持つている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

この夏、ロンドン・オリンピックが開催され、日本人選手の活躍に日本中が沸きました。彼ら

の活躍を見て、多くの人が勇氣や力を与えられる経験をしたことと思います。大きな成果を果らせることのできた選手たちの姿を見ていただけで、そこに至るまでの長い道のりやコツコツと地道な努力を積み重ねた様子が想像され、人間にはこのようなことができるのだ、このように生きることができると、希望を与えられた思いがします。そのオリンピックも終わり、このころ目につく報道は、それとは対照的に私たちの気持ちを悲しませ、落胆させるものばかりです。いじめにあつて自殺をしたり、あるいは事業がうまくいかなくて、家族を殺し、自らも後を追つて自殺をしたり、このようなニュースを聞くたびに、どうにかして生きる道を見出せなかったのかと、残念に思います。失敗したり、周囲の人に理解されず、攻撃されることは、とてもつらいことです。自分はもうだめだ、生きてるのがつらい、と思うようになるのも当然でしょう。絶望のあまり、希望を見出せなくなるという経験、皆さんもされたことがあるかもしれません。先に掲げた聖書の箇所は、そのような希望を見出せず、絶望の中にある人に語りかけられたイエスの言葉です。

イエスはたとえ話をしました。百匹の羊をもっている人が、そのうちの一匹を見失ったとき、残りの九九匹を野原に残して、その一匹を捜し回らないだろうか。そして見つけたら、喜んでそ

の羊を担いで帰って、友達や近所の人を呼んで、「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」と言うだろう、そのようにイエスは語りました。つまり、失われた一匹が再び見出されることは、この上ない喜びだということです。そして、これは罪人のことを言っているのだとイエスは言いました。罪人、すなわち過ちを犯した人が、自らの過ちに気づき、悔い改めること、これは失われた魂が見出されたことを意味し、大きな喜びに値するのだと言ったのです。

一節にあるように、イエスのところへやって来て話を聞こうとしていたのは、徴税人や罪人でした。彼らは律法に従わずに罪を犯し、あるいは徴税人の場合は正規の税金の額に上乘せしてお金を集めることを行い、いずれも人から嫌われ、社会から疎外されていた人でした。人々から受け入れられず、後ろ指をさされて生きてゆく彼らの生活は過酷なものであったでしょう。過ちを犯してしまったわが身を嘆き、疎んじられるわが身を悲しみ、つらく悶々とした思いで日々を生きていたことでしょう。しかし自分では、どうしたらこの状況を打開できるのか分からず、藁にもすがる思いでイエスの話を聞きに来ていたのだと思います。そのような彼らの思いをイエスは受け止めていたようです。彼らが苦しみ、悲しみ、悔いている、その様子をイエスはしっかりと見ていて、そのように深く悔いる彼らの魂は、もはや彷徨さまよっておらず、彼らは見出された存在である、と言ったのです。そしてそれは見失われた羊が見出されると同じ大切な瞬間、深い喜び

をもたらず何事にも代えがたい大切な出来事であると言ったのです。それなのに、フアリサイ派や律法学者たちはそのような人の苦悩や嘆き理解せず、ただ律法を守らなかつたという表面的なことだけを気に留めて、罪人と一緒にいるイエスを非難したのです。そのような彼らに、イエスは人として何が本当に大切なことであるのかを示したのです。

失敗したり、過ちを犯したり、人に理解されずに孤独を経験するのは、誰にでもあることです。その中で希望を失い、生きる力を失うこともあるでしょう。魂が迷い出てしまうこともあるでしょう。しかしそこで苦しい現実から逃れようとするのでなく、その現実を見つめ、自分を見つめ、それを受け止めて生きること、そして自らの至らなさを認め、そこからもう一度、自分の歩むべき道を捜し求めようとする、このような思いが、人としての道を開いてゆくことをイエスは教えています。どんなに苦しく絶望的な状況の中でも、もう一度あるべきところへ立ち帰り、人が生きようとする、これは人間の営みの中で、とても大切な出来事で、何事にも代えがたい大きな喜びであることを、私たちは心に留めたいと思います。自らに対しても、そして周囲の人に対しても、そのように人の歩みを受け止めることができるよう、願うものです。

「一つに結び合わせる神の力」

大学宗教授 原田浩司

マタイによる福音書、第十九章三―六節

3 ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。4 イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とお造りになった。」5 そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。6 だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

去る二〇一一年にメキシコ市議会で、離婚の手続きにかかる面倒を省くために、二年間の期限を付けた「仮結婚」の許可を認めるよう要請する法律の改革案が議会に提出された、とのニュースがありました。メキシコでは、結婚したカップルの約半分近くが離婚してしまう、しかも、その大半が結婚から僅か二年以内にしてしまうそうです。そうした現状を反映して、この議案が提

出されたというのです。現状に合わせたかたちでの法改正なのですが、法律そのものに問題点や欠点があつて改正をするならなら違和感はありませんが、このニュースには、何ともしっくりこない、腑に落ちない点があるのではないかと思われました。この法律の改正案自体も奇妙ですが、それにも増してメキシコにおける離婚率の高さには改めて驚かされます。

さて、学生の皆さんは、仕事に就いて収入を得ているわけではありませんから、自分の「結婚」ということについて考えるのはまだまだ先で、皆さんの目下の意識にあるのは、この大学でしっかりと無事に単位を取つて卒業し、就活戦線を乗り越えること。それが皆さんが意識している現実的な課題だと思えます。他方で、こんなニュースも目にしました。それは今春、九州大学で半期の「婚学」という新しい講座が開講されたというのです。しかも、これが何年生向けの講義かと言うと、「一年生」を対象とした講義だということです。「教養選択科目」ですが、想定していた数の五倍もの受講希望者で、この講義はとても賑わつたそうです。これは大学一年生でも結婚について考えようとの積極的な意識が高いことも示しているでしょう。

皆さんの人生は大学を卒業してからも続いていきます。学生の皆さんはやがて卒業し、社会人となり、やがては結婚を現実的に意識する時も来るでしょう。この十年余り、日本では経済状況等が反映して、晩婚化が進んでいることも皆さんもニュースで聞いたことがあると思います。で

すから、皆さんが二〇代で結婚するのか、三〇代で結婚するのか、四〇五〇代になるのか、それとも結婚しないのか、それは誰にも分かりませんし、他ならない皆さん自身も「自分がいつ結婚するか」など、まったく分からないことです。しかし、学生たちの間では、自分の将来を見据えて、結婚について学生の時代からしっかりと考えておきたいという意識は、先ほど紹介した九州大学の例が示すように、とても高いものであると思います。

そこで、改めて今日の聖書の言葉、特に一つの言葉に集中します。それは「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」です。短い言葉です。しかし、結婚について大切なことが示されています。ここに「男は」とありますが、なにも男に限ったことではありません。「人は父母を離れて、夫と、または妻と結ばれ、二人は一体となる」と言った方が、現代においてはより適切でしょう。この言葉が示している第一のこと。それは「結婚の目的」です。「結婚したい」と思う気持ちがあっても、そこで、何のために結婚をするのか、一度立ち止まって、是非考えてみましょう。

先日、「体育の日」の祝日のことですが、土樋キャンパスの礼拝堂で、本学の卒業生の結婚式を執り行いました。結婚式は教会で行うのは、西欧諸国では当たり前ですが、日本でも近年、キリスト教式の結婚式を挙げるカップルが増えています。ある本の中で、結婚をしたいと望むカップ

ルと、結婚式の司式を依頼され牧師の間で交わされた、こういう話を目にしました。

ある牧師のところに、教会で結婚式を挙げたいと希望するカップルが相談に来たそうです。「この人と結婚をしたいので、結婚式を挙げてください。よろしくお願いします」。すると、その牧師がカップルにこう尋ねました。「お二人は何のために結婚するのですか?」。このカップルは二つ返事で「いいよ」と承諾してもらえたとばかり思っていたので、率直に答えました。「わたしたち、互いに好きで、愛し合っているからです」。すると、この牧師が聞き返します。「そうですか。では嫌いになつたらどうするのですか?」。カップルはこたえました。「嫌いになつてなりませんし、もし嫌いになつても分かれたりしません」。すると牧師が更に尋ねる。「そんなことはないでしょう。相手が好きだから一緒にになりたいのなら、嫌いになつたら別れたいと思うのが自然じゃないですか?」。牧師はこの面接の後、結局、このカップルの結婚式の司式を引き受けることを辞退したというのです。

さて、この牧師は何も意地悪をしているわけではありません。「結婚」には、自分の、また自分たちの期待や願望や理想どおりに行かないことがあります。そういうことの方が多いかもしれません。改めて考えたい。何のために結婚するのか? 皆さんもいつかそう自分に問い直す時が来るでしょう。皆さんは聖書を手掛かりにして、この点について考えることができるでしょう。今日

の聖書の言葉には「父母を離れ、二人は一体となる」とありました。結婚とは人生を共にし、互いの人生を分かち合うことです。一緒に生きること、それは一体となって生きることです。自分の願望や期待、また理想が崩れた時が来ても、夫が妻に、妻が夫に対して言うべき言葉は何でしょう。それは相手を責める言葉ではないはず。それは「あなたが共にいてくれる。それだけで私は嬉しい」。この素直な思いと言葉が大切です。「あなたが共にいてくれる」。それが嬉しい。それは、実は神がわたしたちに語りかける言葉です。聖書が、主要なテーマとして一貫して語り続けるのが「神と人間との関係」です。神にとって、あなたがいてくれること、それが喜びです。神は「共に生きる、一緒に生きる」ことを求め、望み、欲しておられる。共に生きる。それが神と人間との関係であり、わたしたち人間同士の関係です。そして、「一つに結び合わせる」。それは、私たちの力で成し遂げることもはるかに増して、実は神に由来する力です。それこそが、聖書が私たちに語りかける愛の力です。

学院大学での学生生活を通して、そして大学礼拝を通して、結婚ということに関しても、皆さんには学識としてだけでなく、一つに結び合わせる神の力、愛の力を、ぜひとも養っていただきたいと思えます。

「働きによらない賃金」

総合人文学科長 原 口 尚 彰

マタイによる福音書、第二〇章一―一六節

1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行つた。2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送つた。3 また、九時ごろ行つてみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払つてやろう』と言つた。5 それで、その人たちは出かけて行つた。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行つてみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇つてくれないのです』と言つた。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言つた。8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払つてやりなさい』と言つた。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取つた。10 最初に雇われた人たちが来て、もつ

と多くもらえるだろうと思つていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。11それで、受け取ると、主人に不平を言つた。12『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱ひにするとはい。』13主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14自分の分を受け取つて帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払つてやりたいのだ。15自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの氣前のよさをねたむのか。』16このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。』

新約聖書に収録されているイエスの喩え話の中には、人間社会の常識とは一見かけ離れたようなものがあり、一体何を言おうとしているのか、よく考えて見なければ分からないようなものがあります。実は、その一つが、今読んだぶどう園の労働者の喩えです。近年、講談社の現代新書の一つとして出版されて、ベストセラーになった橋爪大三郎・大澤真幸著『ふしぎなキリスト教』という書物も、この話を「不可解なたとえ話」の一つとして槍玉に挙げています（二二〇—二二二頁を参照）。話の結末が世の常識からはあまりにもかけはなれているので、著者の社会学者

たちは、聖書の中でイエスが時々間違つたことを言うことの例証とすら考えたのです。

問題の喩え話は以下のような内容です。あるぶどう園の所有者が、夜明け前と朝九時と一二時と午後三時と五時という具合に、全く違つた時刻に日雇いの労働者を雇い、一日一デナリオンの報酬を払うという約束で働かせました（マタイ二〇・一―七）。一日の仕事が終わり、賃金の支払いの時になり、その日の賃金が所有者から個々の日雇い労働者に手渡されました。所有者は各自が実際に働いた労働時間に関わりなく、一律に一デナリを個々の労働者に支払いました（二〇・八一―九）。すると、朝から一日中働いた労働者は、夕方の五時に雇われて一時間しか働かなかつた者と同じ金額しか貰えなかつたことが不満で、所有者に強く不平を言いました（二〇・一〇―一二）。それに対して、所有者は労働の対価として一デナリ支払うというのは当初の約束通りだ、また、主人の他の労働者に対する気前良さを妬んではいけないと言つて労働者の不平を退けてしまいました（二〇・一三―一五）。

社会生活の常識は、働きに応じて報酬を受けるということで、そのことは普通の人を抱く正義感に適っています。長時間働いた者は、短時間しか働かなかつた者よりも、労働時間に応じて多くの報酬を受けるといふのが、通常ならば公平であると感じられるからです。もし、一生懸命に長時間働いた者も、ごく短時間しか働かなかつた者も同じ扱いを受けたら、労苦を惜しまず真面

目に働く者が社会からいなくなってしまうでしょう。旧約聖書の箴言は社会生活に関する格言を集めた書物ですが、民衆が抱く正義感に適う応報原理に従って、一生懸命働く者はその報いとして豊かになり、怠け者は貧しくなると言って、勤勉に働くことを勧めています。例えば、箴言一〇章四節後半は、「勤勉な人の手は富をもたらす」と述べ、二〇章四節は、「怠け者は冬になっても耕さず、刈り入れ時に求めるが何もない」と言っています。

ぶどう園の労働者の喩え話の作者であるイエスもユダヤ人であり、勿論、このようなユダヤの人々の間に勤勉の美德を説く常識的な考え方があった上で、敢えて挑発的に、この喩え話を語ったのではないかと思えます。この話は、冒頭の句が示しているように、「天の国」についての喩えであり、ぶどう園の主人は神を表し、ぶどう園の労働者は神に仕える信徒のことを言っています。一日の労働の後に支払われる賃金は、世の終わりの時に一人一人の信徒に約束されている究極的救いということを表していると思われれます。そうすると、この喩え話は、「天の国に入る」、もしくは、人が究極的に救われるということに関しては、人間の社会生活上の常識では十分に理解できない部分があるということを強調していることとなります。少し言葉を換えて言えば、人間の究極的な救いということは、人間の側が何か良いことをした報いとして与えられるのではなく、神の側の一方的な恵みとして与えられるということです。そこには働きと

報酬の均衡という原理は該当しません。若い時から神を信じ、その教えに従う生活を心掛けて生きてきた人も、一生の大半を神とは無縁な生活を送っていたけれども、人生の終わり近くになって、悔い改めて神に立ち返り、信じるようになった人も、神が与える罪の赦しや救いということに関しては全く同じであるということを、この喩え話は言おうとしているのではないかと思えます。この喩え話は、人間の救いということに関して神は吝嗇ではなく、非常に気前が良く、誰でも何時でも神に立ち返る者には等しく救いを与え給うということを人々の意表を突いた形で、印象的に語ったということになります。

イエスの喩え話は、当時のユダヤ人の庶民の身近な日常生活から題材を得ていますが、その内容は、当時の社会の常識とはしばしばかけ離れており、私たちに人間について、また、神への信仰について新に考え直すように促しています。信仰というのは、既成の答えに満足するのではなく、常に新に自分で発見することの連続であり、イエスの問いは私たちに自分で考え、新しい発見をするように促しているのです。聖書を読むことは、世界と人生について、新たな驚きを感じ、新たな意味の発見をする営みなのです。

「神に栄光、地に平和」

総合人文学科教授

佐々木 勝彦

ルカによる福音書、第二章一〜二〇節

13 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14 「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

(第二章一三〜一四節)

今日の話は、前半と後半に分かれています。前半では、聖書に何が書いてあるのかを実際に読み、その歴史的背景を辿ってみます。そして後半では、この聖書の話が私たちとどんな関係があるのかを考えてみましょう。

ルカ福音書第二章は、「イエスの誕生」という小見出しがついているように、イエス・キリストの誕生について語っている個所であり、このあとには「羊飼いと天使」の話が続きます。なおこの前の第一章には、洗礼者ヨハネの誕生にまつわる話と「イエスの誕生の予告」「マリアのエリザベト訪問」「マリアの賛歌」の話が記されています。

ルカによると、「イエスの誕生」は、皇帝アウグストゥス（前二七〜後一四）がローマの皇帝であったときに起こった出来事です。このローマ皇帝は「全世界の救い主」と称され、彼の時代は「アウグストゥスの平和」と呼ばれました。これらの称号および賛辞は、当時のローマ帝国が政治的にも経済的にも安定していたことを示唆しています。それにしてもルカは、なぜこのように世界史的な事件から説き起こすのでしょうか。それは、ローマから見ると、帝国の端の端に位置するパレスチナで起こった話です。その答えは、この記事の後半で明らかになります。

事件が起こった場所は「ベツレヘム」という町は「ダビデの町」です。ヨセフとマリアがガリラヤの町ナザレから向かった「ベツレヘム」という町は、「ダビデの町」とも呼ばれていました。この地は、今から三千年ほど前に統一王国を建設したダビデ王が、幼年期に羊飼いをしていたところだからです（サム上二六・一八）。その統一王国が分裂して崩壊し、やがて捕囚を経験した後の人びとは、この地から、ダビデのような「平和」をもたらす救い主が生まれると期待していました（ミカ五・一―五）。

六節以下にはこう書いてあります。「彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶のなかに寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」イエス・キリストの生まれた場所は、皇帝の住む宮殿の一室でも、宿屋でもあり

ませんでした。それは人間以下のものとみなされていた家畜小屋でした。

八節以下には「羊飼いと天使」の話が続きます。羊飼いの働く場所、それは皇帝の住む都市でも、宿屋のある町でもありません。それは、悪霊が住むと人びとから恐れられていた辺境の地です。神の喜びの知らせは、まず、この辺境の地に住む羊飼いたちに伝えられました。

一一節に出てくる「メシア」とは、元来、王や祭司になるための就任式において「油を注がれた者」を指し、やがてそれは「正しい治世をもって国を治める理想的な王」や「救い主」を意味するようになりました。このメシアをギリシア語で表記すると、キリストとなります。したがって、イエス・キリストという名前は、イエス・救い主という意味です。イエスという名前は、一章三二節に「生まれてくる子をイエスと名づけなさい」とあるように、天使がマリアにあらわれ、生まれてくる子に名づけるように命じたものです。この名前は決して特殊なものではなく、ヘブライ語ヨシュア（イエシュア）をギリシア語で表記したものです。それは「神は救い」という意味です。このようにギリシア語で表記されているのは、当時の地中海世界の共通語がギリシア語だったからです。新約聖書はギリシア語の世界なのです。

一九節には、「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」と記されてい

ます。この言葉は一章三七節に出てくるマリアの言葉を思い起こさせます。マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と答えています。羊飼いたちの驚きと喜びと讚美に満ちた激しい動きと、マリアの動こうにも動けない静けさは、クリスマスのお出来事に対する二つの対照的な態度を示しています。

では後半の話に入りましょう。すでに気づかれたように、このイエスの誕生物語には、二人の「全世界の救い主」が登場します。そして二人とも「平和の君」と仰がれています。一方は、政治の力により、軍備の力により、経済の力により、敵を打ち破り、「平和」を実現しようとした人物です。しかしこのローマ帝国も、やがて他の軍事力、つまりもつと強い敵によって滅ぼされてしまいました。歴史は、いかなる帝国も、文明も、永遠に続かないことを教えています。

他方、イエス・キリストが生まれた場所は、宮殿でも、旅先の宿屋でもなく、家畜小屋でした。これはもちろん両親が望んだことでも、また偶然的な出来事でもありませんでした。マリアはそれを神の意志と受けとめました。意外なことに、神は、最愛の御子の誕生の場として、家畜小屋の飼葉桶を選んだのです。

この出来事は、神は、私たちの求める豊かさの中ではなく、むしろ貧しさの中におられるこ

とを示しています。したがって、神はどこにおられるのかと問われるならば、「神は権力や富の中ではなく、むしろ小さく弱き者の中に、貧しき者の中におられる」というのが聖書のメッセージです。救い主イエスは飼葉桶の中に生まれ、天使によるその救いの知らせは、まず辺境で働く羊飼いたちに伝えられました。神は弱く貧しい者のうちに現れるのです。

成長したイエス・キリストは、この神の意志に従って、力による平和ではなく、病む者、苦しむ者、貧しき者、社会から見捨てられた者、弱い立場にある者に寄り添う生き方により、神の国に備えようとなりました。それは、愛に生きる平和への道です。イエスの生き方と教えは「あなたの敵を愛せよ」という彼の言葉に示されています。敵を愛するとき、真の「平和」が訪れます。真の絆が回復されます。天使の「神に栄光、地に平和」との讚美の歌声は、すでにこのイエス・キリストの生涯を予告していました。「栄光」とは、神がこの世に現れるさまを表しており、私たちの思いとは反対に、ここでは、その栄光の光は貧しい姿をとりました。それは、平和をもたらすためです。この平和は、人と人の間の平和だけでなく、なによりもまず神とひとの間の平和を意味しています。

しかし誰もが知る通り、この生き方は、決して簡単に実行できるものではありません。死ぬ覚悟がなければ不可能な道です。イエス・キリストは、この「敵を愛する」生き方を貫いた結果、

十字架にかけられ、その生涯を終えました。しかし神はこの生涯をよしとされ、彼を復活させました。ここからキリスト教が誕生します。

クリスマス、それは天使の歌声に合わせて「神に栄光、地に平和」と祈り、愛に生きるイエス・キリストの生涯を思い起こし、平和の実現に向かって、一歩踏み出す勇気がすでに与えられていることを確認するときです。イエスがその与えられた生を神の意志に従って捧げようとしたように、私たちも与えられた人生を感謝し、育み、この預かった命を神様にお返しするときまで、愛の人になろうと改めて決意するときです。

クリスマスの今日、貧しき私たちの間に宿られたイエス・キリスト共に、彼がその生涯をかけて実現された愛の優しさに包まれつつ、この場を去り、家に帰り、改めてマリアのように「これらの出来事をすべて心に納めて、思いめぐらして」みましよう。

「幸い」

経営学部教授 保坂和男

教会に來たパンフレットを見て、世界では飢餓で苦しんでいる子供達が多いことを知りました。それ以来、飢餓で苦しんでいる人たちに手を差し伸べようという運動の会員になり、気持ちだけですが飢餓で苦しむ子供達を思い、祈りの中で覚え続けています。今朝、読んだ聖書の箇所、マタイによる福音書五章三節の見出しには「幸い」と書かれています。三節で「心の貧しい人々は、幸いである」と言います。「心の貧しい」人の意味ですが、心に悩みがあり苦しんでいる人は幸いであると思われまゝ。なぜなら、天国はその人たちのものになるからであると述べられています。経済的に精神的に苦しんでいる人ほど、神を求め、祈ることが多く、天の国を切望するでしょう。苦しみ、悩みを抱える人ほど、神を求め、祈ることが多ければ、神を思い、慰められる筈です。悩みや苦しみで困難にある人にとって、このみ言葉は、慰めとなった筈です。四節でも同じように、こう言います。「悲しむ人々は、幸いである」。それは、神よりその人は慰められるからです。慰められる人は、楽しさの中にいる人ではなく、悲しんでいる人だからこそ、神により慰められます。何で悲しむか、さまざまでしょう。親しい人との別れ、病気になる人への思い、人を傷つけてしまったこと等、悲

しむことが多いのが現実です。でも、聖書は言います。だからこそ、悲しむことが少ない人と比べれば、神によって慰められることが間違いない多い筈だと思えます。五節では、柔和な人は幸いであると言います。柔和な人とは、辞書で意味を確かめると、性質・態度がおとなしい人と記載されています。柔和な人は、したがって、人を思いやり、他人への尊敬と謙遜をわきまえている人でしよう。柔和な人は地をうけつぐと述べています。地をうけつげば、神の作られたこの世界で祝福を受けることが多い筈でしよう。

六節で言う「義に飢え渴く人」とは、どういう人でしようか。義とは、辞書の意味を調べてみると、物事の理にかなったこと、人間の行うべき筋道と記載されています。それゆえ、義とは、神の前での正しさと言えます。義に飢え渴く人は、神の前での正しさに飢え渴き、正しさをひたすら求める人と言えます。このような人は、それがゆえに、神の祝福によって心満たされる筈です。七節で言う「憐れみ深い人」とは、単にかわいそうに思うのではなく、相手の立場で考えることが出来る人でしよう。したがって、相手からも憐れみを受けるので幸いであると述べています。八節では、心の清い人は幸いであると述べています。心が清いとは、ただ純粹に神をのみ考え、濁りがなく、透き通った状態にあることですが、このような人は神のみを見ることができるので、幸いであると述べています。九節で、平和を実現する人は、幸いであると述べています。それは、そのような人は神の子と呼ば

れるからであると言います。人間の歴史を見てみれば、戦争や紛争のなかった時は殆どないことを知ります。十節では、義のために迫害される人々は、幸いであると述べています。義とは、物事の理にかなったこと、人間の行うべき筋道です。ここでは、神の前での正しさがゆえに迫害されることがあっても、幸いであると言います。

ところで、法律・ヨーロッパ思想史が専門の宮田光雄先生が書かれた「いま人間であること」(岩波書店)という小冊子があります。この本の冒頭でグリム童話の中の「幸せなハンス」という物語が紹介されています。話のあらすじは、次のようなものです。奉公してきたハンスが、郷里の母のところへ帰るので「頭ほどもある大きな金のかたまり」を給金として貰います。それを肩に担いだハンスは、重くて足をひきずりながら歩いていきます。そのとき馬に乗った人に出会い、金のかたまりを馬と取り換えて貰います。ハンスは、駆け出した馬から投げ出されて、溝の中へころげ落ちてしまいます。そのとき牝牛を追ってきた農民に出会い、馬を牛と取り換えて貰います。ところが牛がハンスの頭を蹴とばし、彼は気を失ってしまいます。子ブタを手押し車に乗せた肉屋が通りかかります。肉屋は、牛と子ブタとを取り換えてくれます。しばらくすると、白いガチヨウを抱えた若者と道連れになりブタとガチヨウと交換して貰います。最後の村を通っていると、手押し車をおした鉄研ぎ屋に出会います。ハンスはガチヨウを手渡し、代わりに砥石をうけとり、おまけとして、

道端にあつた重い石まで渡されます。こうして話のはじめの頭ほどある金のかたまりは、二つの石としてハンスのもとに返ってきます。ハンスは「心から満足して」最後の帰途につきますが、水を飲もうと身をかがめたとき、石は二つとも泉の中に落ちてしまいます。ハンスは大声で言います。「俺ぐらい運のいい人間は、天下に二人とあるまい」。心もうきうきとして、ハンスは故郷のお母さんのところに帰りました。

以上が「幸せなハンス」の物語のあらすじです。ここで注目したいのはハンスがとても幸せだったということ。頭ほどの大きな金の塊ですから、金額的には相当高額なものだった筈です。最後には二つの石をも落としてしまい、金額的には無価値になってしまいます。でも、ハンスは、自分ほど幸せなものはないと思っています。なんと愚かなことよと思う読み方が正しいのかもしれない。実は、愚かなことよと思う見方の根底には、別の考え方があってしょう。この世に生まれただけには人以上に苦勞をし、競争に打ち勝ち、人よりも富を獲得し、豊かな暮らしをするのが幸いだと思う考えがあると云ってよいでしょう。

私たちは、今、この現代において生きています。宮田先生は、この小冊子の最後でこのように言っています。「他人より多く持つことよって幸せを求める生き方は、いつまでも相対的な窮乏感を募らせるだけではないでしょうか。・・・本当の人間らしさとは何か、人間らしく生きるとは何か、そ

もそも『生きる意味』は、何かということ、今、あらためて、原点に立ち帰って考え直さなければならぬところにきているのではないでしょうか」と結んでいます。最初に世界では飢餓で苦しんでいることも多いことを述べました。富める人々の無関心が飢餓の問題を難しくしていることを思います。今、あらためて、生きることを意味を考え直さなければならぬと思いました。ここにおられる皆さんが、聖書を読んで、主の御ことばに耳を傾けることを切に願うものであります。

主に信頼する勇氣

経営学部教授 松村尚彦

箴言第三章五〜六節

5 心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず

6 常に主を覚えてあなたの道を歩け。

そうすれば

主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる。

大学生活がはじまって四ヶ月がたちましたが、みなさんはどんな大学生活を送っているでしょうか？高校時代に思っていた大学生の自分と、今の自分は大分違いますか？それとも思っていた通りの自分でしょうか？

ここで少し唐突ですが、皆さんにお聞きします。アメリカの有名な起業家を三人挙げてくださいといったら、誰の名前を挙げるでしょうか？もし名前が分からなければ、会社名でも構いません。ちよつと心のなかで思い出してみてください。

どうでしょうか？私が挙げた三人は、

マイクロソフトのビルゲイツ氏

アップル社のスティーブ・ジョブズ氏

Facebook社のマーク・ザッカーバーグ氏

です。

実は、この三人にはある共通点があります。たとえばこの三人は全員が二〇代にビジネスで成功して億万長者になっています。そしてもう一つの共通点は、大学を途中で中退しているということ
です。

もちろん私は億万長者になることが良いことだと言いたい訳でも、大学中退を奨めている訳でもありません。ただ自分のやりたいことを見つけて、他のことを捨ててまでそれに取り組むという三人に共通する姿勢は素晴らしいものだと思います。でも「自分のやりたいことを見つける」というのが、本当に難しいんですね。これは私自身も若い頃散々悩んだことですし、今もその悩みが解消されたという訳ではありません。

そこで皆さんもよく知っているアップル社のスティーブ・ジョブズ氏が、どのようにして自分のやりたいことを見つけたのか。そこに興味を感じて、少し調べてみることにしました。そうしたら

私自身とても驚いたんですが、実はスティーブ・ジョブズ氏も最初からやりたいことが決まっていた訳ではなかったのです。

彼は大学に入るには入ったのですが、自分の人生の中で何をやりたいのかが分からないので、大分悩んでいたそうです。そしてたつた六ヶ月で大学を中退してしまいます。でも中退するのは本当に怖かったそうです。世間的には大学を卒業して一定の社会的地位を得られる道を捨てた訳ですし、かといって彼の将来を保証してくれるものは何も無いわけですから。でも不思議なことに彼は、何の根拠もないのに、心のどこかで、自分にとって、それが全てうまくいく道だと信じていることができたそうです。

ただ実際の生活は悲惨でした。夜寝るところもないので、友達部屋の床に寝泊りさせてもらったり、食費のためにコーラ瓶を店に返して五セント集めたり、教会や寺院で貧困者向けに提供している食事を食べに七マイルの道を歩いたりしたそうです。しかしこうした自分の興味と直感だけに従う体験が、あとになってスティーブ・ジョブズ氏にとってかけがえのないものにならなっていくのです。ひとつ具体的な話をしてみましょう。

彼は大学を中退したあとも、好きな授業にもぐりで聴講していたそうです。そんな彼のお気に入り授業のひとつに文字の装飾に関する授業がありました。そこではアルファベットを色々な形で

装飾したり、文字の間隔を調整して美しく見せたりするスキルを学んだのですが、ジョブズ氏は、その文字の美しさに魅了されて夢中になって文字の装飾を学び続けました。でもその時にはそれが何の役に立つかは全く想像もつかなかったそうです。

それから十年後、彼はマイクロソフトが全盛時代のパソコン業界に、全く新しいパソコンであるマックを作り出し、世に送り出すことになります。世間はその既成概念にとられない新しいパソコンを驚きを持って迎えました。美しいグラフィック、マウスによる操作、そして何よりも人々がマックに魅了されたのは、単調な文字ばかりであったパソコンの文章を美しく蘇らせたマックの文字フォントだったのです。

そうステイブ・ジョブズ氏が、もしあの時に、文字装飾の授業に潜り込んでいなければ、その美しさに惹かれて、文字装飾のスキルを習得することに夢中にならなければ、マックの成功も、そして今使っている私たちのパソコンの美しい文字フォントも存在しなかったかも知れないのです。

こうしたことは本当に偶然の結びつきでした。でもジョブズ氏にとってこれは単なる偶然を超えた経験だったようです。どういうことか？しばらくジョブズ氏の言葉を一緒に聞いてみましょう。

「もちろん大学にいた頃の私は、予め未来を見据えて点と点をつなげようとしていた訳ではありません

せん。ただ後から振り返ってみると、あの時やっていたことが今に繋がっているということが分かるだけです。」

「でも歩む道のどこかで点と点がつながると信じていました。たとえ人と違う道を歩んでいても、自分の内なる声に従い続けられていれば、全てが変わる。そう信じていたのです。」

「だから私にとって一番大事なことは、自分の内なる声、様々な雑音に打ち消されないようにすることでした。自分の内なる声こそが、私たちが本当に望んでいるものを知っているのです。」

このようにジョブズ氏は、もし私たちが良い人生を歩みたいと思えば、勇気を持って自分の内なる声に信頼しなさい、と言っています。誰にも未来のことは分かりません。しかし自分の内なる声に信頼して行動しつづけていけば、それが好ましい偶然を引き寄せる力となって、点と点がつながっていくと言うのです。

私自身は、もう中年になりましたが、この言葉を聞いて、もう一度新しい未来が開けたような希望に満ちた気持ちになりました。皆さんも、もし自分がやりたいことが分からないで悩むような

ことがあったら、「自分の内なる声に信頼し行動し続ける」というジョブズ氏の言葉を思い出し出していただければ嬉しく思います。

またジョブズ氏の言葉は、私たちクリスチャンにとっては、冒頭でお読みした箴言の言葉を思い出させます。もう一度ここで読んでみましょう。

「心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず

常に主を覚えてあなたの道を歩け。

そうすれば

主はあなたの道筋をまつすぐにしてくださる。」

自分の分別に頼らず、主に信頼して歩む勇氣を持てば、私たちが本当に望んでいるものを知り、それにたどり着くことができるのだ、聖書はそのように語っているのだと思います。

「天に積む富」

法学部准教授 横田尚昌

マタイによる福音書、第六章一九～二三節

19 「あなたがたは地上に富を積んではならない。ここでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。20 富は、天に積みなさい。ここでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。21 あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。

22 体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、23 濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」

みなさんは、この聖句を聴いて、ここで伝えようとしていることは何となくわかるし、そのとおりかもしれないと考える方もおられると思います。しかし、それと同時に何か釈然としないものを感じるのではないでしょうか。確かに、たとえば虫がつくとか、錆の出る心配がない金の延べ棒でもってこの地上に富を積むこととしても、それを盗人に盗まれる危険は避けようがありま

せん。しかし、だからといってこの地上に富を積んではならない、ということにはならないのではないか。やはり、だれもがその時々を幸せな思いで過ごすために必要な富は、虫がついたり錆ついたり盗まれたりする危険を冒してでも、積み立てたいと思うのではないでしょうか。旅行に行ったり、欲しい商品を購入したりするために富を少しずつ積み立てていく、そうすることを誰も否定することはできないはず。それなのに、聖書は、この地上に富を積んではならない、富は、天に積みなさいといわれるのです。そもそも、その天にどうやって富を積むというのでしょうか。仮に天に積んだところで、それによって天にめされたとき、楽天の生活が保証されるというのでしょうか。このように、現世の物質的な富に着目して、聖書の御言葉を聴くと、どうしても矛盾と戸惑いの淵にたどり着いてしまいます。

そこで、この聖書に言う富とは、いまのべた物質的な富とは異なる意味合いをもつのではないかと少し考えてみる必要が出てくるわけです。

ある書物には、次のように記されてあります。

すなわち、そもそも、人に見せるための行為は、たとえそれが善行、善い行いであっても所詮地上の富である。これは自分の業績を他人の評価にまかせる生き方であり、他人の評価のための生活を営むことになる。人の評価は不安定であるし、時とともに忘れ去られる。あるいはもつと

優れた業績をあげる者によつて、彼の過去はにわかには色あせる。であるから人は善行にあたつて、それを他人に見せることを心がけず、むしろ隠れた行為によつて神からの報いを受けるといふ、天上の富をこそ求めるべきである。この聖書の個所は、かように受け止めるべきだと説かれていました。

そうだとすると、天に富を積むこととは次のように考えられるのではないでしょうか。

さきほど、私は旅行に行くために、あるいは欲しい商品を購入するために富を蓄積することは誰も否定できないはずだと申しました。しかし、いくらお金をかけて旅行に行つても、その思い出がすばらしいものでなければ意味がなく、いくら高価な物を買つてもそれを使いこなせなければ無駄遣いの感を否めません。旅行を有意義なものとするためには、やはり事前の下調べや行動計画を十全にしなくてはならないし、商品を買つてよかつたと思えるようにするためには、それを使いこなせるようにしなくてはならないのです。そして、そのような地味で成果の見えにくい陰ながらの努力をやりおかせてこそ、真の達成感が得られると思うのです。しかも、こうした達成感というものは、目標そのものが達成できなくても、不思議と得られた感じがするものです。

では、なぜそのように感じるのかといえば、これは、一つには旅行前の計画や下調べ、買った商品を使いこなせるようにするための準備といった努力それ自体が自己を成長させる役割を果た

しているからだといえましょう。しかも、その成長は、間違ひなくこれまで以上に人の役に立つ人物になることを後押しするはずで、なぜなら、壁にぶち当たつても何とかやりおこせようとする踏ん張りは、自分のためのみならず人のためにもなると思えなければ、なかなか生まれこないし、持続できないものだからです。そして、その努力がいずれ人の役に立つと確信できるときに、苦しみの中から喜びや希望をもてるようになるのだと思います。

このような真の達成感とは、人からの評価を得たいという思いが先行すると、ついつい見失いがちとなりましょう。なぜなら、そのような思いでいると、目に見える成果の取り繕いばかりに追われて精神的にも追い込まれていくからです。もちろん、それによつて客観的な目標は達成され、地上の富は得ることができるかもしれませんが、しかし、そのような無理をして天に富を積むことは難しいと思われのです。

地味で成果の見えにくい陰ながらの努力、裏表のない実直な努力をおしみなくする先には、人の評価をこえたもつと大切なものがある。そう信じていることができるかどうか分かれ目だと思います。見た目の成果ではなく真の達成感を得ることこそが、天に富を積むことに通じるのではないか、そのように考えます。そして、そのナローパスを通つて得られた成果のみが朽ちない普遍的な価値を得ることになるのだと思います。

ある企業の採用担当者が、次のように言っておられました。

学生時代に、何か一つのこと、それは人から評価される結果が出せたかどうかはどうでもよい、たとえ趣味のことであってもよい。とにかく何か一つのことをやりおおせたといい切れる学生は強い、目に力がある、そういう明るい人物を採用したい、そうおっしゃっていました。

お祈りをいたします——

「一粒の麦」

工学部教授 星宮 務

ヨハネによる福音書、第二章二三〜二五節

23 イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。24 はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。25 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。

皆さんは「一粒の麦」という言葉をお聞きになったことがあるでしょうか？みなさんご存知の現代の生物学によれば、一粒の麦の種子の中にはDNAと言う遺伝子があつて、その性質が子供や孫の代にまでずっと受け継がれる事が知られておりますから、麦の一粒が食べられないで蒔かれたのなら、実つて実をつけるのは当たり前だ、と思われるかもしれませんが。

しかし、この言葉は、「二人の人が自己犠牲をして、そのことが周りの人間を大きく変え、その輪が広がってゆく」という意味で読みとることができます。本日お読みしました聖書の箇所も、「十字

架にかかって亡くなられたイエス・キリストの精神が人々の心を変え、出会った人々の心の中にいつまでも残って、イエスの教えがそれ以後ずっと受け継がれている」ということに、この言葉が対応している、と理解できると思うのです。

また、この一節は、世界中の方々に多く引用されています。たとえば、有名なロシアの文豪であるドストエフスキーは、その代表作である「カラマーゾフの兄弟」の表題の裏に、この言葉を引用しております。

さて、一人の人が亡くなった代わりに、その方の思い出がいつまでも受け継がれることは、世の中ではしばしばあります。ここでは、私が見聞きしたことを一つの例として述べたいと思います。

それは私が高校一年生の前期試験の時の事でした。ちょうど世界史の勉強をしていた私は、親しい人に呼ばれ、茶色に変色した、世界史の試験問題を見せてもらいました。そこにはこのような問題がのつておりました。

問1

A子さんと言う若い女性をBさんとCさんの2人の男性が批評して言いました。Bさんが言うに

は、

「A子さんは背がすらりとして長身で、目がパッチリして健康的に日焼けしている活発なお嬢さんですね。」

一方、Cさんは同じA子さんを評して

「A子さんは背高ノッポで、どんぐり眼（まなこ）で、色が黒いじゃじゃ馬だ。」
と言いました。

諸君たちはこれをどう考えますか？

問2

ソクラテスは青年たちに「無知の知」と言うことを自覚させた、偉大な哲学者だ、と言う評価と、ソクラテスは青年たちを惑わす有害な人物だ、と言う評価の2つがあるが、諸君たちは上の評価に對してどの様に判断しますか？

以上が高校1年生に對する世界史の試験問題の一部でした。問1を解くポイントは、Bさんと言う男性はA子さんと言う若い女性に對してよい印象を抱いているが、Cさんの方はBさんに對して

良い印象を抱いていない、と言う点です。そのために、全く同じ現象を見ても正反対の印象を持つ、ということですよ。

この、あまりにも独創的な世界史の問題は、——この問題を大切に保管していた先輩と同様——、深く私の心に残りました。

大人になって、私は歴史学の先生がたから、上に述べた事は歴史学を専攻する学生にとっては、「史料批判」

——その史料の著書が対象に対してどの様な感情を抱いているかを把握した上でその史料を読むこと——

と言つて、歴史学では本質的に大切なことであることを教えられました。この世界史の問題は、それを高校生向けにわかりやすく述べたものであつたのでした。

私は思わず感動してしまいました。つまり、その問題を出题した世界史の先生が、

「高校一年生にそんな高度な事を教えてもわからないだろう」

と考えれば、そんな問題は出题されるはずはないのです。何百人の中に一人でも、二人でも自分が大事に考えている事に将来気づいてくれるのではないか。その様な、生徒に対する根本的な期待感・

信賴感があつたからこそ、この様な驚くべき独創的な試験問題が出題されたのだ、と私は思いました。

そうして調べている中に、もつと驚くべき事がわかつて参りました。実は、その世界史の先生——永年本学の史学科で西洋史の教授をされており、残念ながら昨年亡くなられたO先生とおっしゃる先生ですが——、その先生のお話では、実はその先生が高校生の時に、同様な経験をされたそうです。O先生が中学生の当時、東北学院中学高等学校の校長は月浦先生という方でした。校長先生の英語の授業の時に、『私はびつくりした』と言う内容を表す英語は

“I was surprised”

と受動態の形をして、能動態の表現はない。これを“能動態欠如動詞 (deponent verb) ”と呼ぶと、習つたそうです。

O先生は後に歴史学の研究者となつて、ギリシャ語やラテン語を学習した時に初めてこの“能動態欠如動詞”と言う文法用語に触れ、高々中学生を教えるのにまでギリシャ語文法の該博な知識に裏打ちされたこの先生の教育態度に改めて感激されたそうです。

その様な体験を校長先生から学ばれたからこそ、O先生ご自身が、高校生に対して——まるで時限爆弾をセツトするように——、将来たつた一人でもいいから気づいてくれるように、と高度

な内容を秘めた教育をされたのだと、私は思います。

教育とは、まさに人と人との出会いです。先ほど述べたお二人の先生方の様に、教師が学生諸君を信頼でき、また我々教員が学生諸君から信頼されるようではなくてはならないと思います。

最後になりましたが、今度の日曜日から、クリスマスまでを待ち望むアドベント（待降祭）の期間に入ります。神様から私たち人間に与えられた最大の贈り物である、イエス・キリストの誕生を人々が祝ってお互いにプレゼントを交換する日が間近い季節になります。

キリスト教を精神的なベースに持つ東北学院大学のキャンパスの中で、教師と学生諸君との出会いがあり、少なくとも教育の面での人格的な出会いができる、その様な雰囲気を作っていくことができれば本当に幸いなことだ、と私は思っております。

祈ります。

「おむらさん」

工学部機械知能工学科准教授

長 島 慎 二

詩編二十三編

1 賛歌。ダビデの詩。

主は羊飼しゆひつじかい、わたしには何も欠なにかけることがない。

2 主はわたしを青草あおくさの原はらに休やすませ

憩いこいの水みずのほとりに伴ともない

3 魂たましいを生いき返かえらせてくださる。

主は御名みなにふさわしく

わたしを正ただしい道みちに導みちびかれる。

4 死しの陰かげの谷たにを行ゆくときも

わたしは災わざわいを恐おそれない。

あなたがわたしと共ともにいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖

それがわたしを力づける。

5 わたしを苦しめる者を前にしても

あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭に香油を注ぎ

わたしの杯を溢れさせてくださる。

6 命のある限り

恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り

生涯、そこにとどまるであろう。

ルーテル教会の最初の宣教師について調べていた折、東北学院の三校祖の一人、シュネーダー先生の夫人アンナ・マーガレット・シュネーダーが著した「OMURA SAN」という書物に出会いました。

出版は明治三十八年、出版元は米国改革派教会の海外伝道局です。O MURA SAN というのは、宮本むらという女性の愛称です。宮城学院の最初の卒業生となった四人のうちのひとりとなった方です。

明治五年四月四日に仙台の宮本家という商家にひとりの女子が産まれました。むらと名付けられました。おむらさんは二歳の時に片方の目が炎症を起こして失明します。八歳（明治十三年）になって学校に通い始めますが、片方の目が見えないことから、「貞山様」と呼ばれ、いじめられました。その同じ年に、押川方義は石巻で育った吉田亀太郎と共に新潟から仙台に伝道の地を移します。押川らは北三番丁木町通角屋敷を借りて伝道を始めますが、翌年には拠点を国分町に移しています。おむらさんは両親の知らない間に、押川のバイブルクラスに出席するようになります。

その後、宮本家の隣に小平という家族が引っ越して来ます。小平家は押川と吉田の集会に出席し洗礼を受けたようですが、おむらさんの父に、おむらさんを基督の集会に連れていくことを提案します。一方、おむらさんの父は、おむらさんが父に読んで聞かせたヨハネによる福音書の十四章に心が動かされて押川と吉田の集会に参加する決心をします。おむらさんが十三歳のとき（明治十八年）におむらさんと両親は国分町にあった小さな礼拝堂で洗礼を受けたのです。

その翌年のことです。押川らは、北六番丁木町通に一屋を借り受け、学生を寄宿させて牧師養成を始めます。東北学院の始まりです。また、プルボー、オールトが七月十六日に仙台に着任し、九

月二十四日に東二番丁地田辺繁久別邸にて十名の生徒で女子のための学校を始めます。宮城学院の開学です。プルボーらは横浜から塩竈までは船で、仙台までは馬車を利用しました。おむらさんは夜遅くに何人かと共に市街地から遠く迎えに出ました。おむらさんは、宮城学院の最初の生徒となりました。二十一歳のときに卒業して、上野の音楽学校に進学しますが、残された目の視力も悪くなつて、東京に二年半を過ごした後に仙台に戻ります。シュネーダー夫人の手伝いと、学校で聖書と音楽を教えるようになります。

さて、明治三十三年の東北学院英語神学部卒業生に吉村末吉という若者がいました。明治二十六年三月に高知教会に於いて宣教師マクルエン氏により受洗し東北学院に学んだ人です。卒業と同時に仙台日本基督教会の主任伝道者になり、同年おむらさんと結婚しました。九月十五日の結婚式はシュネーダー博士が司式を担い、シュネーダー夫人が祝宴の食事の準備をしました。

おむらさんと吉村末吉氏が結婚した年の翌年である明治三十四年の四月中旬に新しい牧師館が完成します。仙台日本基督教会は、明治二十年に東二番丁の本願寺別院跡を取得した後、明治三十四年十月に新会堂の献堂式を行ったのでした。おむらさんは新しい牧師館に入って、主婦として、牧師の妻として相応しい生活を守ります。牧師給は低いものでしたが、おむらさんはご主人に、きちんとした身なりを整えました。

明治三十四年六月二十四日、二人の間に男子が産まれます。名前は信一、しんちゃんと呼ばれました。おむらさんは、家事や学校の仕事に加えて、夕方から個人的にも教えました。更に、ご主人の両親や姪の世話があり、そして病気であつたご主人のお兄さんの世話もしました。故郷を離れて学んでいる東北学院や宮城学院の生徒たちは、牧師館をあたかも自宅のように思い、訪ねて来ました。さて、明治三十五年の夏、おむらさんとシュネーダー夫人は来る冬に向けて多くの計画を立てます。特に、キリスト教について知識の無い女性に対するバイブルクラスを始めることに興味を抱いていました。しかし、天の父は別のご計画を持っていらつしやつたのです。

九月二十九日のことです。吉村夫妻に二人目の男子が産まれます。おむらさんは四日目に高熱に襲われます。シュネーダー夫人は直ちにクリスチャンの医師を送りましたが、日曜日の朝（十月五日）に再び病状が悪化し、月曜日の朝には、おむらさんはシュネーダー夫人に使者を立てて、直ぐに会いたいと伝えます。

「ミセス・シュネーダー、これまで、わたしにしてくださいました。わたしはもうすぐ死にますので、話を聞いてください。」

「おむらさん、あなたがいなくては何もできません。あなたはわたしにとって大きな存在でした。あなたが必要です。あなたの愛する夫もこどもたちもあなたを必要としています。それに、キリス

トのために行うことがまだ多くあるのです。」

「そうですね。しかし、神はわたしが神の国に帰ることを望んでおられるのです。ですから、わたしが話すことを聞いてください。徐々に話すことができなくなっているのですから。」

こうして、おむらさんは、シュネーダー夫人に、葬りの際の衣服のことなどを話し、その間、ご主人は涙をもって神に助けてくださいることを祈ったのです。

「さて、ミセス・シュネーダー、彼らを送つてからわたしの子供たちを連れてきてください」

子供たちが連れて来られると、おむらさんは愛おしい眼差しで見つめて言いました。

「わたしの愛しい息子たち、牧師になつてキリストのために魂を救つて欲しいのです。」

そして、ご主人に向かつて、

「パパ、彼らの世話を頼みます。」

「ミセス・シュネーダー、わたしの子供たちをよろしくお願いします。」

そして、子供たちに別れのキスをしたとき、おむらさんは、はじめて泣き崩れたのです。「おお、かわいそうな私の赤ちゃんたち」

子供たちがその場から連れて行かれ、夫妻だけになって、シュネーダー夫人ら残りの者たちは別の部屋で祈つたのでした。

おむらさんは痛みが続き、息をすることも困難な中で、周囲の人々の魂の救われんことを祈りました。信仰を持つていない医師などを説得し、教会の出席とキリストの学びを約束しないと満足しないのでした。

おむらさんは日に日に弱くなり、話すことも判らなくなってきました。九日目（十月八日）には、見ることも聴くこともできなくなりました。十日目（十月九日）には、何も話さず、見ると、まるで聖人と話しているかのように微笑んでいました。十一日目（十月十日）の十一時頃、話ができるようになり視力が回復します。彼女は、再び親しい人々を呼び寄せ、彼女が天国に行く事を話します。

「わたしは既に、命の水を飲みました。」

そして、詩篇二十三篇と五十一篇を読んでもくれるように頼みます。読み終わると、彼女は周囲を見回し別れを告げました。そして、耳が遠くなった母を見ながら天を指さしたのです。全ての痛みは彼女を去りました。息は自然になり、穏やかな中で天を指さしたまま目を閉じ眠りに付いたのです。彼女の最後を見とったクリスチャンの医師は言いました。「なんとという輝かしいキリストの証人であるか。」

東北学院に関係したひとりのキリスト者の話でした。祈りましょう。

「人生を変える秘訣。パートⅠ」

教養学部准教授 大澤 史 伸

はじめまして、教養学部地域構想学科の教員の大澤史伸と言います。どうぞよろしくお願いいたします。大学では「社会福祉論」、「福祉市民活動論」等を教えています。

突然ですが、私は、綾瀬はるかという女優が好きです。綾瀬はるかは、皆さんもご存じのように、今から八年前の二〇〇四年七月から九月までTBS系で毎週金曜日の夜一〇時から放送された「世界の中心で愛を叫ぶ」に主演しました。全一回で平均視聴率約一六%、この作品は、映画同様大ヒットをし、ザテレビジョンの第四二回ドラマアカデミー賞で最優秀作品賞を含む九冠を達成しました。そして、綾瀬はるかは助演女優賞を受賞しています。

彼女はこの作品で、ガンに冒されたヒロインを演じる為に、自分の髪の毛をそり、なんと体重を六キロ落としています。さらに、最終回では健康で元気だった頃の回想シーンを演じるために一週間で四キロ体重を増やしたのです。

このように、このドラマは綾瀬はるかの出世作となり、それ以後の活躍ぶりは皆さんもよくご存知のはずです。この作品と出会う前の綾瀬はるかは、ほとんど仕事がなくたまに雑誌モデルをする

というぐらいでした。綾瀬はるかはこの「世界の中心で愛を叫ぶ」という一つのテレビドラマとの出会いによりその後の自分の人生を大きく変えることになりました。

今日の聖書にも自分の人生を一つの出会いによって変えることのできた男の話が出てきます。自分の人生を変えるための秘訣を共に学んでいきましょう。

新約聖書ヨハネによる福音書第九章一八四ページを開いて下さい。ここで一人の生まれつき目の見えない人が出てきます。イエスの弟子がイエスに聞きます。二節を読みます。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。」

この当時のユダヤ人は、病気や不幸と本人が犯した罪との間に何らかの因果関係があると信じていました。つまり、この人が病気や怪我をしたり、不幸になったのは、本人か両親が悪いくことをしたから神様からばちが当たったという考えです。

しかし、イエスは次のように答えています。三節を見て下さい。「イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」弟子たちがこの目の見えない人の原因を尋ねていることに対して、イエスは原因ではなく目的を答えているのです。しかも「神の業がこの人に現れるためである」と。

つまり、弟子たちにとっては目が見えないということはマイナスであると考えたことに対して、イ

イエスは神の業が表れるというプラスの出来事であるということを弟子たちに教えているのです。私たちの目ではマイナスであると思えることも実はプラスであると考えることが自分の人生を変えるためには必要なことなのです。

次にイエスは、四節で「わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。とあります。これは文字通り、なすべきことを昼の間に行わなければならない。ということなのです。私たちは時間は永遠にあると思いがちです。でも、そうではありません。いつか終わりが来るのです。人間にとって、それは死である場合もあれば、したくてもできない状況かも知れません。

いずれにしても、限られた時間を有効に使うことが人生を変えるためには必要であることは間違いがありません。

次に六節から見てください。「こう言うてから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。」そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行つて洗いなさい。」と言われた。そこで、彼は行つて洗い、目が見えるようになって、帰つて来た。」とあります。

ここでは、イエスのいやしの行為が具体的に記されています。唾と泥をこねて目の見えない人に塗ると言うのと、何だか汚いと思うかもしれませんが、古代世界においては、それはごく普通のこと

でした。そして、つばと泥を塗られた目をシロアムという池に行って洗えと言うのです。シロアムの池は、幅六メートル、長さ九メートルの屋外貯水池でした。

目の見えない男は、イエスの言葉を信じて行動を起こすのです。そして、結果は今、読んだとおりに目が見えるようになったのです。

イエスは神の子ですから、すぐに目を癒すこともできましたが、ここではあえて違う方法を取っているのです。唾と泥をこねて目に塗り、さらに、シロアムの池に行かせて洗わせるといふかなり細かい方法を取っています。

自分の人生を変えるには、信じて行動を起こすということが大切であることが分かります。

最後にこんな話をして終わりたいと思います。星野富弘という人がいます。彼は体育教師だったのですが不慮の事故で、首から下が完全に麻痺してしまいました。彼は何度も自殺を試みます。ある時、病院を訪問していたキリスト教会からもらった聖書を読み、①人生のマイナスはプラスに変わることを知り、②入院している時間を大切にして、③口に絵筆を加えて文字や絵を書くという行動を起こすことによって、現在は、口に絵筆を加えて絵と文字を書く、芸術家としての新たな人生を歩んでいます。

私たちも、①人生のマイナスはプラスに変わることを知ること、②時間を大切にすること、③行

動を起こすことによって自分の人生を最高に生きていこうではありませんか。あなたのために祈りをいたします。

imagine how many wars would be avoided if people returned good for evil? Can you imagine how many crimes would be avoided if people did not fight back when someone treated them badly? Can you imagine what this campus of Tohoku Gakuin University would be like if each of us loved even those people who did not like us—in other words, if we loved even our enemies? I think that we would be overwhelmed by what would happen if we did good things to people who did bad things to us.

Returning good for evil is Christian love. It is the love God showed us when God sent Jesus Christ to die for our sins. Even though we rejected God, God loved us enough to sacrifice God's only Son, Jesus Christ, that we might once again be able to fellowship with God. Though we have treated God like an enemy, God still loves us. I pray today that you will accept God's love and that you will show that love to others; and I pray especially that you will show that love to people you previously thought were your enemies.

of love felt between a boyfriend and a girlfriend. For example, have you ever tried to love somebody who has been mean to you? Have you ever tried to love someone who has said bad things about you? Have you ever tried to love someone whom you did not like? As Jesus put it, have you ever tried actually to love an enemy? It is difficult to be kind to someone who has been mean to you. It is difficult to say something nice about someone who says only bad things about you.

Nevertheless, the love Jesus was talking about was just this kind of love—love of enemies. Jesus explained that it is not difficult to love people who love us. That is easy. If someone does something nice to you, it makes you feel good, and you naturally want to do something good for that person in return. When someone says something nice about us, we appreciate that and we naturally want to say something nice about that person in return. Jesus even uses the example of lending money to explain this principle. He explains that if we lend money to people and hope to get that money returned to us, there is nothing particularly good about that. Even sinners do that! Furthermore, if someone hurts us, though we may want to take revenge against that person, Jesus tells us that we should not hurt that person; instead, we should show kindness to that person. In other words, we should return good for evil.

Can you imagine what our world would be like if people showed this kind of love to each other every day? Can you

SERMON : "Loving Enemies"

When we think about love, we probably think most often about loving people who are close friends or family members. Sometimes, however, we also speak about loving things. We might say, "I love ice cream," or, "I love pretty sweaters," or "I love to go to "baseball games." In other words, when we say we love something, we are talking about something that we like very much. This is the kind of love we see in the movies all the time. Actors and actresses in American movies often speak about "falling in love." When a man and a woman "fall in love," they want to spend a lot of time with each other. The husband's and the wife's emotions are deeply affected by what the other person does and thinks. We are all very familiar with this kind of love. It is a powerful kind of love. It is a love that changes people's lives. Because of this kind of love, people become close friends. Because of this kind of love, people get married. Through this kind of love, a man and a woman enjoy the intimate sexual love of the marital relationship. Through this kind of love men and women bring children into the world and build families. This is a wonderful kind of love; and it is a gift to us from God.

However, in the Bible passage we just read, Jesus was speaking to us about another kind of love. It may sound strange to speak of loving enemies, but that is exactly the kind of love about which Jesus was speaking. This is not the warm, affectionate love enjoyed by a man and woman who are married, or even the kind

ENGLISH CHAPEL SERVICE

文学部教授 David N. Murchie (マーチー, デイビッド)

BIBLE READING : Luke 6: 27-36

But I tell you who hear me: Love your enemies, do good to those who hate you, bless those who curse you, pray for those who mistreat you. If someone strikes you on one cheek, turn to him the other also. If someone takes your cloak, do not stop him from taking your tunic. Give to everyone who asks you, and if anyone takes what belongs to you, do not demand it back. Do to others as you would have them do to you.

If you love those who love you, what credit is that to you? Even 'sinners' love those who love them. And if you do good to those who are good to you, what credit is that to you? Even 'sinners' do that. And if you lend to those from whom you expect repayment, what credit is that to you? Even sinners lend to 'sinners,' expecting to be repaid in full. But love your enemies, do good to them, and lend to them without expecting to get anything back. Then your reward will be great, and you will be sons of the Most High, because he is kind to the ungrateful and wicked. Be merciful, just as your Father is merciful.

編集後記

大学宗教主任 原 田 浩 司

二〇一二年年度の『大学礼拝説教集』を皆様にお届けすることができていることを心から喜び、ここに寄稿して下さったお一人おひとりに感謝を申し上げます。

この説教集に収録されている説教は、この一年間に東北学院大学の三つのキャンパス（土樋、泉、多賀城）の礼拝、そして三か所にある学生寮（泉男子寄宿舎、泉女子寄宿舎、旭ヶ岡寄宿舎）の夕礼拝で実際に語られたものの中のごく一部です。大学礼拝は、講義の期間は週日毎日、各キャンパスで同時刻に行われ、学生寮の夕礼拝は週に一度行われています。東北学院大学は創立以来、変わることなく三位一体なる神への礼拝を大切にしてきました。

東北学院大学で学ぶ学生たちは、本学に入学してはじめてキリスト教に接する者が圧倒的に多数を占めます。そのため「大学礼拝」における説教は、そのような聴き手への語りかけとして、一定の配慮が求められます。しかも、限られた礼拝時間の中、説教は冗長になってはなりません。九分以内でまとめる必要があります。ここに収録された説教は、東北学院大学における各説教者たちの格闘の足跡でもあります。

この一年は二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災からの「復興元年」と位置づけられましたが、被災地の本当の復興までにはまだまだ時間がかかります。被災地に立つキリスト教主義大学として、東北学院大学はこれからも弛まず希望と慰めの福音を東北の地で語り続けていきます。

大学礼拝説教集

第 十七 号

二〇一三年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 佐々木哲夫

編集責任者 大学教主任 原田 浩司

出版 社 株式会社 アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学

宗教事務課

〒 980-8511 仙台市青葉区土樋一の三の一

☎ 〇二二・二六四・六四二八